2022年度国際研究フォーラム

International Research Forum 2022

ミュージアムでみせる宗教文化

Displaying Religious Cultures: A Museum Perspective

報告書

Report

國學院大學研究開発推進機構日本文化研究所

Institute for Japanese Culture and Classics,
Kokugakuin University

2024.2

もっと日本を。もっと世界へ。

國學院大學

國學院大學研究開発推進機構日本文化研究所
2022年度国際研究フォーラム
「ミュージアムでみせる宗教文化」報告書

目 次

はしがき …… 3

開催概要 …… 5

国際研究フォーラム「ミュージアムでみせる宗教文化」

第Ⅰ部　大学ミュージアムの中の宗教文化

「来て、見て、体感する神道と日本の宗教文化
—國學院大學博物館の取り組みを通して—」
……深澤　太郎　7

「展示するモノと展示するコト—仏教文化の視点から—」
……熊谷　貴史　15

「キリスト教展示の現状と課題—諸教会の文化をいかに展示するか？—」
……下園　知弥　25

第Ⅱ部　多様性の中の日本の宗教文化

「強制収容所内の信仰と宗教—アメリカの日系人博物館を通して考える
日系人の多様な宗教経験—」
……エミリ・アンダーソン Emily Anderson　37

「アイヌ文化展示が照らす日本・東アジアの宗教」
……北原モコットゥナシ　49

はしがき

國學院大學研究開発推進機構日本文化研究所　所長
平藤　喜久子

本報告書は、2022 年 12 月に國學院大學研究開発推進機構日本文化研究所の主催で開催された国際研究フォーラム「ミュージアムでみせる宗教文化」における議論をまとめたものである。

日本文化研究所は、長年にわたって、国際的な比較の視点を組み込みながら、日本の宗教文化について研究を進めてきたが、近年は、とりわけ視覚文化との関わりにおいて宗教文化を検討することを試みている。例えば、2020 年度には「見えざるものたちと日本人」という国際研究フォーラムを開催し、宗教文化においてしばしば「見えない」ことに特別な意味付けがされる一方で、それが視覚文化においてどのように描かれているのか、あるいは描かれないのか、といったことについて議論した。また、2021 年度には「日本の宗教文化を撮る」という国際研究フォーラムを開催し、宗教の実践においては実体的なモノがあり、またそれに関わる形で行為などのコトがあることになるが、そうしたモノやコトをどのように撮影し、記録し、見えるようにするのか、といったことについて論じた。

これらは、宗教文化に関して文字資料が重要であることを前提とした上で、あらためてモノ資料や、視覚表象とその解釈などを検討しようとするものであったが、「ミュージアムでみせる宗教文化」もまたその延長線上にある。企画に際しては、どのように宗教文化を「みせる」――「見せる」であり「魅せる」でもある――のかということを基本的な問題意識とし、かつそれを、宗教文化教育という局面にも目を配りながら、「ミュージアム」という場に焦点を合わせることとした。

具体的には、全体を二部に分けて構成し、第Ⅰ部「大学ミュージアムの中の宗教文化」では、宗教系大学に設置されている大学ミュージアムの展示担当者に登壇してもらい、宗教系大学という、ある意味で特定の宗教伝統と当事者的に関わっている立場から、どのような展示の試みがなされているのかを報告してもらった。

また第Ⅱ部「多様性の中の日本の宗教文化」では、アメリカにおける日系人の宗教文化や、アイヌの宗教文化についての展示について報告してもらい、それらの豊かさについて学びながら、同時に日本で「日本の宗教文化」をみせようとする際の自明性のようなものを、少し異なる視点から照射することを企図した。

本報告書が、ミュージアムにおける宗教文化、あるいは宗教文化をどのように「みせる」のかについて考えるきっかけとなれば幸いである。

開催概要

國學院大學研究開発推進機構日本文化研究所
2022年度国際研究フォーラム
「ミュージアムでみせる宗教文化
Displaying Religious Cultures: A Museum Perspective」

2022年12月11日、國學院大學研究開発推進機構日本文化研究所では、「ミュージアムでみせる宗教文化」をテーマとして2022年度の国際研究フォーラムを開催した。モノやコトを展示する場としてのミュージアムにおいて、どのように宗教文化をみせるのか、またみせうるのか、その実践や可能性について議論した。概要を以下に記す。

◇国際研究フォーラム「ミュージアムでみせる宗教文化」
日　　時：2022年12月11日（日）13時00分～17時30分
場　　所：國學院大學渋谷キャンパス　120周年記念2号館1階2101教室
報告者（敬称略・発表順）、題目：

［第Ⅰ部］大学ミュージアムの中の宗教文化
(1) 深澤太郎（國學院大學博物館准教授）
「来て、見て、体感する神道と日本の宗教文化」
(2) 熊谷貴史（佛教大学宗教文化ミュージアム学芸員）
「展示するモノと展示するコト：仏教文化の視点から」
(3) 下園知弥（西南学院大学博物館助教・学芸員）
「キリスト教展示の現状と課題：諸教会の文化をいかに展示するか？」

［第Ⅱ部］多様性の中の日本の宗教文化
(1) エミリ・アンダーソン（全米日系人博物館学芸員）
「強制収容所内の信仰と宗教：アメリカの日系人博物館を通して考える日系人の多様な宗教経験」
(2) 北原モコットゥナシ（北海道大学アイヌ・先住民研究センター准教授）
「アイヌ文化展示が照らす日本・東アジアの宗教」

コメンテーター（敬称略）：
［第Ⅰ部］田澤恵子（公益財団法人古代オリエント博物館研究部研究部長）
［第Ⅱ部］高橋典史（東洋大学社会学部国際社会学科教授）
司　　会：平藤喜久子（日本文化研究所所長）
使用言語：日本語
主　　催：國學院大學研究開発推進機構日本文化研究所

本報告書には、上記の講演における報告内容をもとに、報告者の方々にご執筆頂いた報告要旨を掲載している。そのため、タイトルや内容など、報告の際のものから若干変更されている場合がある。また、報告要旨における執筆者の肩書きは2024年2月現在のものとなる。

来て、見て、体感する神道と日本の宗教文化
―國學院大學博物館の取り組みを通して―

深澤　太郎
（國學院大學）

はじめに

博物館において宗教文化を「みせる」ためには、どのような工夫が必要なのか。この「ミュージアムでみせる宗教文化」では、神道・仏教・キリスト教系の大学博物館を取り上げ、それぞれの館における取り組みを比較し、かつ共通点を探ってゆく。その前提として、日本宗教に関する研究成果を公開してきた國學院大學博物館の概要を紹介し、今後の議論の糧に供しておきたい。以下では、特に、「来る、見る、体感する」といった３つのテーマに絞って卑見を述べておく。

Ⅰ．國學院大學博物館に来る

（1）博物館の概要

國學院大學博物館は、1928 年（昭和 3）創立の「考古学標本室（後の考古学資料室、考古学資料館）」と、1963 年（昭和 38）に設けられた「神道学資料室（後の神道資料館）」を淵源とし、2023 年（令和 5）で創立 95 年、2028 年（令和 10）で創立 100 年を迎える大学博物館である。1882 年（明治 15）の皇典講究所開黌と同時に「文庫」として創立された「國學院大學図書館」に次いで歴史の長い大学附置機関であり、「学術資料館」への統合や、「伝統文化リサーチセンター資料館」の設置を経て、2012（平成 24）から「國學院大學博物館」と名称を改めた。現在は、同じく研究開発推進機構内の考古学・神道学研究を担う「学術資料センター」と、1977 年（昭和 52）創立の校史資料室を前身とする「校史・学術資産研究センター」とともに、大学ミュージアム活動の中枢を担っている。

その使命は、1) 日本文化の特質を明らかにするための研究、2) 本学学生に対する教育参考、3) 社会に開かれた大学の窓口としての社会貢献の 3 本柱であり、展示・出版・普及事業・データベース構築などを通して、研究・教育・公開の実を挙げてきた。館内には、直接の来館者に日本文化と神道に関する理解を深めて頂くため、総合日本学

としての「国学」の興りと、國學院大學における研究の歩みを紹介する「校史展示室」、考古資料から日本列島の人類史を概観する「考古展示室」、神道をはじめとする日本宗教の姿を示す「神道展示室」、そして特別展・企画展などを実施する「企画展示室」を設けている。企画展示は、本学が実施してきた研究成果を公開する場でもあり、歴史・文学・宗教関係を中心に、金田一京助没後 50 年・久保寺逸彦没後 50 年に合わせた『アイヌプリ―北方に息づく先住民族の文化―』展や、沖縄返還 50 年を記念した『うちなーぬゆがわりや―琉球・沖縄学と國學院―』展など、アイヌ文化・琉球文化も含め、広く社会の関心を集めているテーマにも積極的に触れてきた。

(2) 博物館の展示

國學院大學博物館の常設展示は、校史・考古・神道の各展示室を中心としている。但し、博物館施設の設えとしては、来館者の動きを規制する強制道線を採用してはおらず、自由に観覧できる形を採ってきた。その中でも、日本の宗教文化に特化して理解を深める観覧順路としては、本学による研究の歩みを辿る 1) 校史→考古→神道展示室コース、日本列島における宗教史をダイジェストで通観する 2) 考古象徴展示→三輪山祭祀遺跡→神道展示室コース、そして神道の概要を理解する 3) 三輪山祭祀遺跡展示→神道展示室コースを薦めたい。

ⅰ）國學院大學の研究成果コース（校史→考古→神道展示室）

第 1 のコースは、各展示室を順番に巡る通常の順路であり、本学が積み重ねてきた研究活動に基づき、日本列島における人類史と、神道をはじめとする日本宗教の特質を明らかにするものである。

ⅱ）日本列島の宗教史コース（考古象徴展示→三輪山祭祀遺跡展示→神道展示室）

第 2 のコースは、考古展示室冒頭の象徴展示、すなわちモノリス状のハイケース群に先史時代以来の宗教文化に関するマスターピースを展示することによって、日本宗教史のダイジェスト的な理解を促すことからはじまる。突き当りには、今日的な日本宗教の原型が確立されていった中世の鏡像を展示しているが、古墳時代の祭祀に関する展示コーナーから右折すれば、後述する「三輪山祭祀遺跡展示」を経て、神道展示室へ入ってゆく。

ⅲ）神道と日本文化コース（三輪山祭祀遺跡展示→神道展示室）

第 3 のコースは、奈良県桜井市大神神社の神体山である三輪山の麓、山ノ神遺跡における磐座の様子を再現したコーナーを起点とするもの。古墳時代における祭祀遺跡の姿から、神祇祭祀の原型が形成されてゆく様子を捉えた上で、古代の公祭、神仏習合の中の神道、そして四季の祭礼などについて学ぶ神道展示室を観覧する。

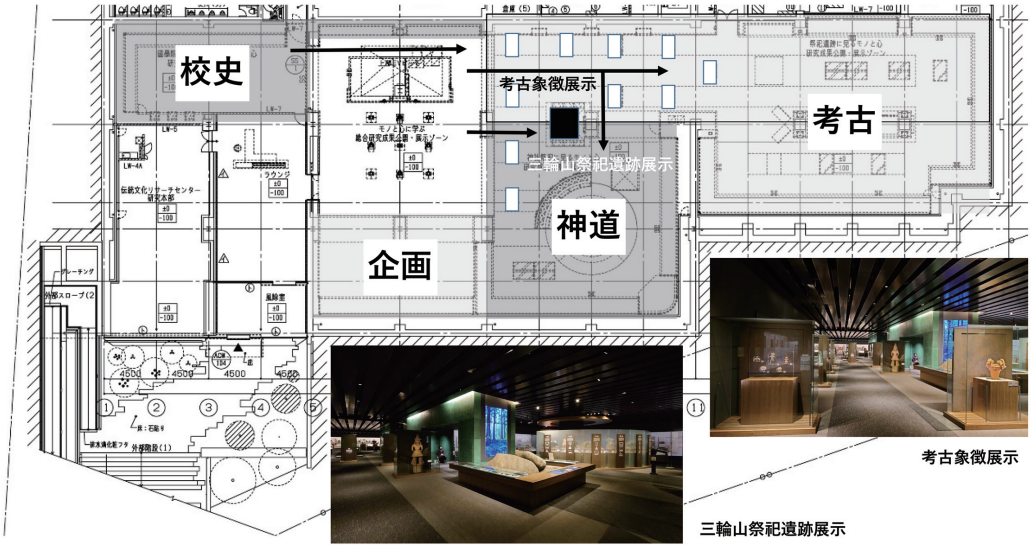


図１　館内概要図

Ⅱ．國學院大學博物館で見る

（1）神道のはじまり―非創唱宗教の展示―

博物館資料は、何よりも実物であるという点に、来館者の心をキャッチする重要なポイントがある。しかし、それは、あくまでモノが辿ってきた最終段階の姿であり、誰が、何のために作って使った（場合によっては廃棄に至った）のか、というプロセスやコンテクストを示しにくい点に難があった。とりわけ、宗教を含む人の心の問題を、どのように展示するかという課題は大きい。

就中、当館の主要な展示テーマである神道は、仏教・キリスト教・イスラム教などの創唱宗教と異なり、明確な教祖･教義･教典を伴わずにはじまった経緯がある。従って、その展開過程や内実についての展示は、曖昧なものにならざるを得ない。しかし、2 世紀後半まで「大乱」の中にあった倭国において、多様であった各地の葬祭が解体され、大型前方後円墳を頂点とする新しい墓制が汎列島的に支配的となった 3 世紀半ばの現象は、その間に新たな国家と宗教、すなわち「日本」と「神道」の原型が生まれた事実を示唆するものである。そして、かかる古墳時代の神祭・葬祭が、律令期に確立する神祇祭祀へと展開してゆく経緯については、考古・神道の両部門を擁する当館ならではの取り組みによって、より明快な説示が可能になるであろう。

（2）信仰者の視点―信仰対象としての博物館資料―

ところで、宗教資料をどのように見せるのか、という点にも様々な課題がある。モノである博物館資料としての宗教資料は、学術的な研究対象である以前に、信仰の対象であったり、信仰の美術であったり、信仰の記録であったりするのだ。

宗教資料の「見せ方」というテクニックの部分でも、単に製作技法・使用痕跡などの諸特徴を見易く説示するだけではなく、信仰者の視点を理解した展示を心掛けるべきであろう。ある時、展示ケースの中の仏像・神像に対して、来館者が「こんな所に入れられてかわいそうに……」と呟いた場に遭遇したことがあった。以後、宗教資料を展示する際は、可能な限り周囲に余計なものを置かず、来館者が思わず手を合わせたくなるような雰囲気の演出にこだわっている。例えば、筆者が伊豆国走湯山（現在の伊豆山神社）の歴史に関する特別展『走湯山と伊豆修験』を担当した際には、下から蝋燭や護摩の火に照らされているようなライティングを試み、かつて実際に祀られていた当時の文脈・雰囲気が来館者に伝わるよう工夫したことがあった。

一方、博物館で展示している宗教資料の中には、その性質や、原資料所蔵者の意向などによって、写真撮影禁止とせざるを得ないものが少なくない。この点は、多くの博物館施設が、展示資料の撮影を可とし、データベースの画像も著作権フリーで公開する流れが加速してゆく中、改めて検討を要すべき課題と捉えている。なお、これは神道をはじめとする日本宗教そのものに関わる問題ではないものの、人骨を展示した際には、「○○遺跡から出土した人々は、私たちと同じ現生人類です。観覧・撮影等にあたりましては、人間の尊厳にご配慮いただきたくお願い申し上げます」というパネルを掲げたことを付言しておく。

（3）信仰の空間、宗教的な行為

博物館で展示しにくいものは、「空間」である。かつて、富士山が世界遺産に登録された際に『富士山―その景観と信仰・芸術―』展を開催したが、当然のように富士山を展示室に持って来るわけにいかない。従って、展示し難い「空間」をどのように説示するのかという点も課題となる。つまり、三次元的なものを二次元（画像・動画）に編集したり、それを更に立体模型や3Dイメージで示したり、関連する展示資料にまつわる情報をQRコードなどで閲覧可能にしたりするなどの工夫が必要になるのだ。例えば、『走湯山と伊豆修験』展では、今の伊豆山神社にあたる走湯権現の中枢域について、地形の立体模型を作成した上で、航空写真、地形図、地質図や、前近代の伽藍配置図などをプロジェクションマッピングで示す取り組みを実践した。

また、博物館で展示される宗教関係資料からは、それを作って使った状況、つまり宗教行為の実態を直ちに察知することが困難な場合が多い。通常は見ることのできないエソテリックな宗教行為の現場については、特に撮影・録音等を許可された画像・

動画などを用いて、モノ資料にまつわる「行為」を適切に説示すべきであろう。具体的には、全国各地の社寺で行われる祭祀・祭礼の動画をタッチパネル式画面で館内放映したり、変容してゆく神事芸能に関するアーカイブを蓄積して「國學院大學デジタルミュージアム」で公開したり、YouTube サイトの「國學院大學オンラインミュージアム」において常設展・企画展・特別展関連の番組を作成してオンライン放映するなど、体系的な情報の整理・公開に努めているところである。なお、音声・字幕を付した YouTube 番組は、交通や障害によって直接の来館が難しい方々への便を図るとともに、新型コロナウイルス感染症などの防止に関する点でも効果を発揮した。

Ⅲ．國學院大學博物館で体感する

（1）日本文化を知るために―日本と世界を比較する―

以上、モノ資料と、それにまつわる空間・行為を如何に説示するか、という問題に触れてきたが、やはり宗教文化を「体感」するということも重要であろう。コロナ禍によって、対面事業が難しい局面もあるが、「日本文化を体験する夕べ」と題して、

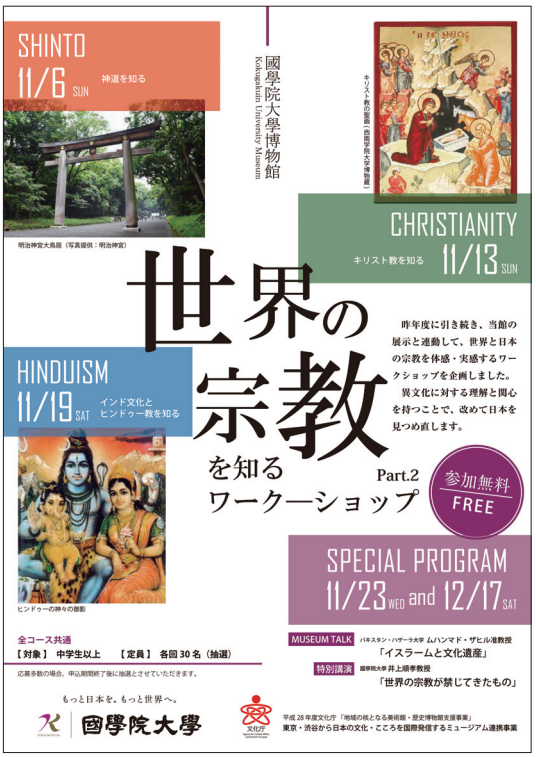


図２　ワークショップ「世界の宗教を知る」・同 Part. 2

主に在日外国人の方々や、留学生を対象に雅楽を聞き、狩衣を着る体験イベントを開催して好評を博した経験もある。日本の文化を、我々日本人自身が理解することも大切だが、外国の方々の理解を深めて頂く取り組みも実施をしているのである。

同時に、神道をはじめとする日本文化の特質を理解するためには、日本宗教・日本文化と、世界の諸宗教・異文化と比較する取り組みが欠かせない。そこで我々が企画したのが、「世界の宗教を知るワークショップ」である。幸い、本学渋谷キャンパスが所在する渋谷区には、日本ユダヤ教団、聖ドミニコ・カトリック渋谷教会、そしてイスラム教のモスクである東京ジャーミイなどがあり、たまプラーザキャンパスが所在する横浜市の中華街には、関帝廟・媽祖廟といった道教寺院が存在する。そして、渋谷区には、明治神宮をはじめとする多数の神社や、修験道の山であった相模大山へ通じる大山街道 246 号線も存在する。かかる当館の環境を活かして、日本の神道・修験道や、ユダヤ教・キリスト教・イスラム教などの諸宗教に関する特集展示・展示解説を実施し、これに加えて現地の宗教行事に参加させて頂くなど、本学学生や、一般の方々を対象とした行事を実施したのであった。これはまさに、博物館に「来て、見て、知る」の実践であるといえよう。

（2）宗教系大学博物館連携と異文化相互理解―日本の中の世界、世界の中の日本―

このように、現代の日本には、多様な国々から来訪した方々だけでなく、アイヌの人々などの先住民族や、在日外国人も暮らしを営んできた。私たちは、このような日本列島の本州を中心とする地域「以外」に由来する文化と、いわゆる日本文化との比較こそが、彼我の文化を理解することに繋がると確信している。

かかる観点から、2014 年（平成 26）にキリスト教系の西南学院大学博物館と「西南学院大学博物館と國學院大學博物館との研究協力に関する協定書」を取り交わし、互いに日本文化とキリスト教文化などを紹介する年数回の相互貸借展示、ワークショップのほか、大きな特別展も共同で開催してきた。これは、2013 年度（平成 25）に、西南学院大学側からの提案によって特別展『日本信仰の源流とキリスト教―受容と展開、そして教育―』を共同開催したことに端を発する。その上で、2018 年（平成 30）に再び「長崎と天草地方の潜伏キリシタン関連遺産」世界文化遺産登録記念として、特別展『キリシタン―日本とキリスト教の 469 年―』も開催した。同展覧会は、もはや日本の伝統宗教の一つであり、隠れキリシタンの問題も含めて日本文化の一端を構成していると言っても過言ではないキリスト教を取り上げ、「日本の中の『世界』」が「日本化」してゆく過程を含めて歴史的な展開を概観したものである。「日本の中の『世界』」に目を向けることは、ひいては「世界の中の『日本』」について考えてゆく契機にもなるであろう。

おわりに

最後に、これからの宗教系大学ミュージアムが果たすべき役割についても述べておこう。

冒頭に述べた通り、独自の研究、学生に対する教育参考、社会に対する研究発信の3点が、大学博物館の主要な使命となるが、今後の宗教系大学博物館においては、宗教文化研究を介した社会のハブとして機能することも求められてくるに違いない。

特に、2000年代以降は、大きな戦争・紛争、あるいは社会の貧困化をきっかけとして、異文化・異民族・異宗教に対するフォビアが、世界的な規模で顕著になってきた。このような人類社会の危機に対しては、学生のみならず、一般社会に対する「宗教リテラシー」の涵養に向けた支援も欠かせない。日本文化を講究してきた國學院大學の博物館においても、異文化・他宗教との比較を通して彼我の特質を明らかにし、人間集団のアイデンティティと密接に関わってきた宗教への理解を深め、これを尊重する態度を養ってゆくことが大きな役割の一つになるのではないかと考えている。

展示するモノと展示するコト
―仏教文化の視点から―

熊谷　貴史
（佛教大学宗教文化ミュージアム　学芸員）

はじめに

佛教大学は浄土宗の宗門校である。佛教大学の附置機関である宗教文化ミュージアムは、京都の近郊、嵯峨広沢に所在する。長閑で美しい嵯峨野の風情を味わうことができる反面、交通アクセスにやや難があり、一般的な京都の観光コースには組み込みにくい。おそらく何かのついでに立ち寄る来館者は少なく、「宗教文化ミュージアムへ行く！」という確固たる決意を要する、と思われる。著名な観光地、また博物館・美術館の選択肢が多く存在する京都にあって、どのようにすれば当館へ足を運んでいただけるだろう。いや、そもそも存在を知ってもらう必要がある。という悩みからはじまる話。

1　佛教大学宗教文化ミュージアムのとある事情

当館は、2003 年に設置された佛教大学アジア宗教文化情報研究所を母体とし、2008 年に佛教大学宗教文化ミュージアムとして改組された。2014 年、博物館相当施設（現・指定施設）に指定。佛教大学の建学の理念である仏教精神「仏教を開いたゴータマ･ブッダ（釈尊）と浄土宗を開いた法然上人とに共通する生き方と考え方」を基軸に、広く「宗教文化」を視野に入れたミュージアムである。

ミュージアムへの改組後も、研究所時代の事業や成果などを踏襲し、また有形資料の収集を主たる目的としない方針を引き継いでいる（研究所時代に「情報」を重視していたことによる）。例外的に、本学のキャンパス開発時に出土した考古資料のほか、学内他部署より移管された幾つかの資料群を保管してはいるものの、館名に掲げる「宗教文化」に関する展示を継続的に構成しうる資料群とはいい難い。換言すると、「宗教文化」にまつわる「展示するモノ」をほぼ所蔵していないのである。したがって展示品は、概して外部からの借用品あるいは寄託品による。

ところで発表者は、当館の学芸員として第三世代にあたる。展示に関して、前身の

研究所時代からミュージアム改組後の初期を担った学芸員は、当館の可能性を模索するような活動を展開、特定の地域や寺院の調査を重ね、その成果を展示に反映した。その後を引き継いだ学芸員は、展覧会の方針や枠組みを整理し、浄土宗に焦点をあてた企画、いわば宗門校として堅実なスタンスの展覧会を重ねた。さらに 2018 年より発表者の世代が着任して現在へ至るが、前任者らが蓄積してきた活動や成果を受け継ぎながらも、やはり展示の在りようには変化がある。担当者によって趣向が変わることはある意味で必然かもしれない。しかし根幹となる「宗教文化」に結びつくコレクションを所有していないことが、その傾向をより顕著にしているだろう。

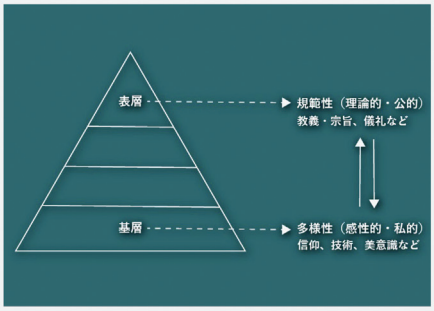
ともあれ現状、仏教・浄土宗を念頭において展示を構想する際には、「浄土宗に特化したテーマ」と「浄土宗を相対的に特徴づけるテーマ」のいずれかを意識することが多い。このうち前者は、宗内や学内の一定の来館者層を見込めるものの、より多くの層に来館を促すことは（館の規模や立地の問題もあって）難しい。そこで近年、浄土宗に限定しないテーマを設定し、そこに浄土宗に関する事項を含めることにより、相対的に浄土宗の特徴にも眼を向ける展覧会シリーズを企図した。特別展「ほとけの手―黙して大いに語る―」(2019)、特別展「ほとけのヘアスタイル―それは単なるオシャレではない―」(2021)、特別展「ほとけのドレスコード」(2022) などである。これらを含め、発表者が担当した幾つかの展覧会を取りあげ、仏教文化の視点から「ミュージアムでみせる宗教文化」に眼を向けよう。

2　宗教文化／仏教文化の捉え方

前提として、本報告における「宗教文化」あるいは「仏教文化」の捉え方を確認しておく。ここでは、ある宗教の在りようを多層的（表層―基層）に捉え、教義や宗旨を「宗教」の表層、基層に展開する多様な事象（必ずしも教義や宗旨に縛られない事柄）を含む概念を「宗教文化」と考える。「仏教文化」は、「仏教」に関わる人間の諸活動を包括する。例えば仏像（仏教尊像）には尊容を方向づける教義・宗旨・図像などがあり、それを指南する僧侶とともに、発願者・制作者・拝観者たちがそれぞれの立場で関与する。制作者の造形技術は、教義や宗旨とは異なる次元で仏教文化を支える要素のひとつ。仏像は有形、技術は無形の仏教文化といえる。

また仏教は、それ自体が極めて多様な側面をもつ。時代や地域を経て成立・伝播した膨大な仏典群と多くの宗派、それぞれに特徴的な思想や活動、そして造形物がある。宗門校を設置する宗派も多く、附属の博物館も散見する。公立館・私立館を問わず仏教に関する展示をよくみかける。展示の対象となりうるテーマや事物のヴァリエーションは、今回、ご一緒させて頂いた神道・キリスト教の方々に比して相対的に多そうである。この点に、仏教特有の事情がひとつあるかもしれない。多くの仏教関連の

○ 文化と宗教／宗教の文化　cf.文化⇔自然
○ 宗教文化：ある宗教の在りようを多層的（表層ー基層）に捉えた場合、基層に展開する多様な事象を含む概念（それに眼を向ける視点）と考える
○ 仏教文化：仏教に関わる人間の営み全般／習合現象を含む
○ 仏教そのものの多様性：伝播・変遷／膨大な仏典群／多くの宗派・宗旨
○ 宗教的造形物（造形活動）
ex.尊像：寺院の本尊・信仰の対象／発願者・制作者・拝観者／図像と表現／素材や技法
○ 仏教美術と文化財
○ 宗教的な行為・機能・情操
○ 禁忌・秘事（⇔公開）



仏教文化

図１「仏教文化」をめぐる視点

展示が企画されるなかで、おそらく発表者の企画はイレギュラーな部類に属す。お声がけ頂いた理由もそのあたりにあるのだろう。その意味で、仏教や仏教文化に関する展示を代表するようなスタンスではない。

なお、ここで「宗教文化」「仏教文化」という場合の文化は、いわゆる指定文化財のような価値づけとは異なるものも含む。例えば、尊像の安置方法や法衣の着装方法などである。また発表者は仏教美術史を専門としているが、美術や芸術という概念にも留意が必要な場合がある。仏像を拝観するとき、あるいは仏像の話題をとりあげるとき、文化財や仏教美術という捉え方に違和感を抱かれる寺院関係者も少なくない。展示に向けてご相談するときには、尊像や什宝を護持されてきた立場を尊重しながら、当方も意を尽くす。ご住職のご意向のみならず、檀家総代の同意を要するケースもあり、そのようなあり方も広義の「宗教文化」や「仏教文化」といえるかもしれない。

3　展示するモノ

物質性をもつ有形の展示品を「モノ」と捉えよう。しかし、仏像を「モノ」と呼ぶには躊躇がある。という感覚もまた、宗教文化の範疇といえようか。仏像は開眼を経て祀られ、移動・修復・浄焚などの際には御性根を抜く（撥遣・閉眼とも）。信仰対象である、という性格が根幹にある。仏教に関する展示では、様々な観点からこの点に配慮する。この事情は当館に限らないだろう。

ともあれ展示を構想する際には、まず「実物」を展示する可能性を考え、諸条件

図２ 「展示するモノ」をめぐる視点

（所有者の意向・安置状況・指定状況・保存状態など）を確認する。とくに寺院の御本尊として祀られる仏像は、寺院の営みを考慮し、慎重に検討する必要がある。諸条件が整い、関係各所の許諾を得た場合は、信仰対象である仏像を博物館で展示させて頂くことがかなう。一方、諸々の制限により実物の展示がかなわない場合には、複製・模型・写真・図解などの二次資料を援用して展示を構成することもある。むろんそれらは実物が具える情報量、あるいは魅力に及ばず、しばしばレプリカをめぐる議論で指摘されるように、観覧者も実物を期待する傾向がある。二次資料のみで構成された展示の例も知られるが、現状は特殊な部類に属すだろう。むろん二次資料の製作も形態によってはそれなりの費用や時間を要し、実現には一定のハードルがある。

ところで発表者の場合、展示コンセプトを大まかにつくり、それに相応しい展示品の候補を選定し、調査・出陳交渉を重ねて展示に反映する場合が多い（継続的・悉皆的な調査の成果に基づいて展示コンセプトが案出される場合とは順序が逆になる）。特別展「ほとけのヘアスタイル―それは単なるオシャレではない―」（2021）も、先立つ展覧会の後継企画として、テーマやコンセプトは早い段階で固まっていた。如来の螺髪、菩薩の髻、明王の焔髪など、仏尊・仏像の髪に焦点をあてよう。そして浄土宗にまつわる事項として、五劫思惟阿弥陀をとりあげたい。阿弥陀如来は、かつて法蔵菩薩であったとき、衆生を救うために長い時間（五劫）思惟したという。この思想を背景とする五劫思惟阿弥陀如来像は、髪が長く伸びた状態を表し、長い時間の経過を表象する。ただし螺髪という仏（仏陀／如来）特有のヘアスタイルを基調とするため、

ロングヘアではなく、ボリューム感を増し、しばしばアフロヘアに擬えられる。これはぜひ事例を展示したい。しかしながら準備は難航。というのも新型コロナウイルス感染症拡大の影響により、外部での調査が困難な状況が続いたからである。

そこで従前お世話になっている仏師の前田昌宏氏に、無理を承知で尋ねてみる。五劫思惟阿弥陀如来像の新造である。「いいですよ」と二つ返事。この造像は、模像や複製ではなく、あくまで前田氏のオリジナル作品とすることにした（形式を参考にした御像は存在する）。その顛末および成果は、試論的に別稿「現役仏師が造った仏像の展示―レプリカではないことをめぐって―」（『佛教大学宗教文化ミュージアム研究紀要』18、2022）に記したが、この新造の五劫思惟阿弥陀如来像は「模型的機能を担うオリジナル作品」と位置づけておく。また制作の記録と彫技の分析を通じ、古像の造形を読み解く手がかりを得たことは、副産物的な成果であった。

なお平行して展示可能な五劫思惟阿弥陀如来像の調査を進め、結果的には江戸時代の作とみられる小像の出陳がかなった。前田氏による新作とあわせ、五劫思惟阿弥陀のボリューム感あふれる特徴的なすがたは、立体造形物の展示によって強く印象に残っただろう。

さらにこの展覧会では、別途、前田氏が制作を手がけていた未完成の不動明王像を展示させて頂いた。不動明王も特徴的な髪をもつ仏尊であり、展覧会の趣旨に合致する。そしてこの御像は、将来、寺院に納められる。したがって信仰の範疇においては本物、いわば真正性を具えることになる。また展示期間中、前田氏のご都合のよい時には当館内で適宜制作を進めてもらい、その様子を来館者が見学できるようにした。制作が進むと、過日のすがたは二度とみることができない。制作の場は、前田氏の気さくな人柄もあって、観覧者との対話を含む和やかなムード。いずれ寺院にお祀りされた際には、あらためてお参りに行きたいという声もあった。前田氏と施主のご住職のご厚意によって実現した、実験的な展示であった。「展示するモノ」としては未完成の仏像であるが、仏像制作の工程や技術という、無形の仏教文化を垣間見ることができる。後述の「展示するコト」に結びつく視点である。

なお前述の五劫思惟阿弥陀如来像は、展覧会の終了後も寄託品として平常展示などで活用させて頂いていたが、後日、京都市内のある浄土宗寺院とご縁を得て、奉納されることになった。喜ばしいことである。しかし「展示するモノ」がひとつ減った。と思っていたら、発表者を哀れんだ前田氏が二代目を制作してくださることになった。現状、木組みをした段階で展示をしている。初代は展覧会に向けた急ピッチの制作であった。今回はなるべく時間をかけ、ゆっくり制作を進めて頂くことにしよう。観覧者が次に来館される際には、少し彫り進められているかもしれない。

4　展示するコト

当館は宗教文化シアターという劇場施設を併設している。主に大念仏狂言や六斎念仏などの民俗芸能、いわゆる無形文化財の実演や記録上映などを実施する。開館以来、「展示」と「実演」を同じウエイトで重視する方針がとられ、おそらく展示は有形、実演は無形、という暗黙の棲み分けがあった。しかしこのカテゴライズは、展示の視点や可能性を狭めているかもしれない。仏教文化に属す無形の事象は多岐に及ぶ。無形の仏教文化に眼を向けるような展示。あるいは有形の仏教文化にともなう無形の事象など。様々な視点や方法がありそうだ。

仏尊・仏像の手に焦点をあてた特別展「ほとけの手―黙して大いに語る―」(2019)では、四国地方のある寺院より千手観音像の手部の断片群を借用した。千手観音なので手首先の部材だけで沢山ある（展示には保存状態のよい一部の部材を選定)。どのように展示するか検討の末、通常は眼にすることのない部分や角度が見えるよう、円形の展示台上にランダムに配置することにした。視覚的なインパクトもある。個別には丸みを基調とする平安時代の作とみられる菩薩の手。持物（亡失）に応じてニュアンスを変える手指、断片ながら存在感がある。このうち明らかに後補とみられる部材があり、それはクイズ形式で観覧者に探してもらうことにした（答えは展示室内の別の場所に掲示)。このような視点でみると、この断片群には無形の仏教文化が幾つも付帯している。菩薩の手を造形する技術。破損した菩薩の手を補作する態度や技術。断片となってなお現在に至るまで護持してきた態度。広い意味で仏教文化と捉えうる

図３　「展示するコト」をめぐる視点

図 4　特別展「ほとけの手―黙して大いに語る―」（2019）チラシ・展示風景

事象は多そうである。この展覧会の時点では、そこまで強く意識はしていなかったが、「モノ」にまつわる「コト」をみせる展示を模索していたように思う。

次いで、後継企画となる特別展「ほとけのヘアスタイル―それは単なるオシャレではない―」（2021）を開催。この展覧会では、前述の通り現役仏師による新造の仏像

図 5　特別展「ほとけのヘアスタイル―それは単なるオシャレではない―」（2021）チラシ・展示風景

を展示したほか、幾つか実験的な展示を試みた。ひとつは仏像の正面観をはずした展示である。展示室に入って最初に眼に入る展示ケースには、如来像頭部（金戒光明寺蔵）の左斜側面が見えるように展示。別途、パネルで紹介した螺髪の制作工程と合わせてみると、頭部の局面に粒が整然と並ぶタイプの螺髪の特性を視覚的に把握することができる。また宝冠釈迦如来坐像（清浄華院蔵）は、如来ながら髻を結う珍しい像容。通常、髻は高い位置にあって見えにくく、後方の造形を眼にする機会も少ない。そこで御像の背面がみえるように展示した（この展示は賛否両論があった）。菩薩像に多くみられる髻には、実に複雑な形状も散見する。このような結い方は実際に可能なのだろうか。という疑問から、床山の経験をもつ方にご協力をいただき、近しい関係者の頭髪やカットマネキンで再現を試みた（結果は展示や図録に反映）。

「モノ」にまつわる「コト」を組み込み、観点を増やす。寺院や他館で仏像を拝す際、その観点を思い起こして頂ければ広がりをもつだろう。この展覧会と同時期、京都市内のある寺院で五劫思惟阿弥陀如来像の特別公開があった。また近隣の博物館でも特徴的な頭髪の表現をみせる仏像が展示されていた。しばしばそれらと関連づけた感想を頂戴したことは、企画者の意図に合致し、嬉しい。ただし連携していたわけではないので、内々に「勝手にコラボ」と呼んでいる。

シリーズ第三弾として、特別展「ほとけのドレスコード」（2022）を開催した。仏尊・仏像は、どのような衣を、何枚、どのように纏っているのか。この着装方法は「コト」として提示できる。さらに仏像全般に通じる敷衍性をもつ。チラシのメインビジュアルには、裸形阿弥陀如来立像（転法輪寺蔵）を掲載することにした。本像は

図６　特別展「ほとけのドレスコード」（2022）チラシ・展示品

裸形着装像と呼ばれ、裸形の尊体を造り、実際に衣を着装させてお祀りする尊像である。ただしチラシは、一見、裸形像とは判らないようにデザインした。会場で驚いてもらおう。衣に焦点をあてた展覧会の導入に、衣を着けない仏像を展示する。所蔵されている寺院では、現状、下半身に裙と呼ばれる衣を着けて安置しているが、寺院のご許可を得て、裙は外し別のケースに展示した。ともあれ裸形の尊体に衣を着装させるという様態は、どのような衣を、何枚、どのように纏っているのかという「コト」の把握のうえに成り立つ。展覧会の趣旨に相応しい。と思いながらの準備中、ちょっとした問題が発生。とある国立博物館で、裸形着装像のレプリカを用い、法衣のまとい方を実演・解説する子供向けのイベントが催されていたのである。趣旨が被ったうえにクオリティーが高い。これも「勝手にコラボ」ということにする。

衣にまつわるトピックとして衣文にも注目した。仏像には、Y 字形衣文、翻波式衣文、渦文など、特定の名称で呼ばれる衣文がある。これらは果たして実際の着装のなかで生じる形象なのだろうか。ひとまず布地で再現を試みる。また前出の前田氏に衣文のモデルを制作して頂いた。検証の結果、これらの衣文には、実際の着装にイメージソースが求められる形象、彫刻技法に起因する要素、着装とは直結しないイメージソースなどが推察され、仏像に衣文を表す「コト」の背景（の一端）が垣間見えた（結果は展示や図録に反映）。特徴的な渦文を具える薬師如来立像（神光院蔵）をめぐって、展示した「コト」である。

以上のシリーズ企画とは別の担当展覧会から、展示に反映した「コト」の事例を加えておこう。特別展「チベット密教の美と祈り―北村コレクションより―」（2019）は中島小乃美氏（本学保健医療技術学部准教授／当時）をコーディネーターに迎えた展覧会である。日本仏教とは異質の思想や造形を通じ、仏教の多様性に眼を向けたこの展覧会では、導入の象徴的な展示物として、ミュージアム入口付近に立体マンダラを展示した。立体マンダラには方位が設定されている。しかし展示スペースの条件により、現実の方位に合わせて設置すると、観覧者はまず立体マンダラの背面を眼にすることになる。検討の末、儀礼で用いる状況に倣い、実際の方位に合わせる「コト」を優先して展示した。詳細は別稿「立体マンダラ小考―展示に基づく空間表現への視座―」（『佛教大学宗教文化ミュージアム研究紀要』16、2020）を参照されたい。

最後に浄土宗に眼を戻そう。浄土宗寺院では、基本的に阿弥陀如来像を御本尊として祀る。阿弥陀如来像が単独で祀られるほか、観音菩薩像と勢至菩薩像を伴う三尊構成の場合もある。さらに浄土宗特有の「コト」として、御本尊の左側（向かって右側）に善導大師像、右側（向かって左側）に法然上人像を安置する。また善導大師と法然上人の並称として両大師と呼ぶ「コト」がある（『新纂 浄土宗大辞典』「両大師」項）。当館でも時折、両大師の御像を展示する機会をもつが、その際、一具の像であれば必然的に前述の配置で展示する。しかし一具ではない場合、例えば離れた位置の別の

展示ケースに配す場合などでも、位置関係が反対にならないよう心掛ける（ただし法量や動線の関係で無理な場合もある）。例えば、速報展「浄土宗を支えた版木 其ノ壱―紙嘉・前田嘉右衛門が受け継ぐ―」（2022）では、展示室の両端に設置した展示ケース（行灯型）に、一具ではない善導大師像と法然上人像の版木をそれぞれ展示。その間の展示ケース（覗き型）に阿弥陀経の版木や阿弥陀如来を表した念仏図の版木を展示した。各々独立した展示品であるが、展示空間のなかで浄土宗的な配置を構成する「コト」は、ある種の安定感をもたらし、また展示のコンテクストとは異なるコラム的な話題提供となる。あるいは両大師の配置が逆であった場合、浄土宗関係者は少しく違和感を抱いたかもしれない。

おわりに

以上、仏教文化の視点から「ミュージアムでみせる宗教文化」に寄せた報告とする。なお本稿にはフォーラム登壇時には触れられなかった事項を幾つか含めた。また原稿提出までの期間には、企画展「拝まれてきた仏像―ふたたび拝まれる日をまつ―」（2023）の準備を進めており、2023年の秋、無事に開幕を迎えた。

2024年、浄土宗は開宗850年を迎える。この慶事の裏で、解散手続きを進めている寺院がある。過疎化、少子高齢化などを背景とする、寺院の消滅。解散寺院に祀られていた仏像を展示するとともに移安先を探す。もうひとつの開宗850年。図らずもこの展覧会では、「展示するモノ」と「展示するコト」が完全に一致した。

キリスト教展示の現状と課題
―諸教会の文化をいかに展示するか？―

下園　知弥

はじめに

文化の多様性 cultural diversity は、今日の文化理解における最も重要な概念の一つである[(1)]。教育という観点から言えば、私たちの社会の中で形成されてきた文化の数々には独自の形態と文脈が存しており、そこには何らかの固有の意義があるのであるから、継承者の多寡による優劣や社会への影響力といった力関係に基づく価値観とは切り離して個々の文化を尊重する、というのが今日の教育者一般に求められる基本的態度であり、この抽象的な指針をいかにして具体的に実践していくかが、現代の教育現場が直面している課題の一つである。これは社会教育施設の一種である博物館においても例外ではない。

文化一般に関わるムーヴメントとして多様性をめぐるさまざまな動きがある一方、キリスト教という宗教においては、前世紀より継続してエキュメニズム ecumenism（教会一致促進運動）[(2)]が進んでいるという流れがある。エキュメニズムとは、教派の別を超えてキリスト教全体としての一致を目指す運動・思想であり、神学思想から信徒の実生活の領域に至るまで、さまざまな文脈で一致の可能性が検討され、実践されている。注意したいのは、エキュメニズムは教派の別を解消して一つの合同教会のようなものを作るのが目的ではなく、教派の別・教義の別を維持したままそれぞれの教会が一致できる地点を探るのが目的だという点である。つまり、エキュメニズムにおいては、一致と同様に多様性も重視されているのである。

上記の特性から明らかなように、文化の多様性とエキュメニズムは決して断絶した別々のムーヴメントではない。宗教を文化の一種として捉えるならば、この二つの流れは全体と個別の関係にあると説明できるかもしれない。あるいは、あくまでも異なる文脈で発展してきた別々のムーヴメントだと理解するにしても、今日の諸議論において両者の交わる点は無いとまでは言えないであろう。いずれにしても、この二つの流れの中に身を置く「キリスト教文化の展示をおこなうミュージアム」は、各教派の多様な在り方を尊重しつつその展示をおこなうということが求められている時代状況

の中に在るのである。

本稿[3]では、そのようなミュージアムの一つである西南学院大学博物館の展示事業について、その特色を示したうえで、教派の多様性についての意識がどのように展示の中に反映されているのかという現状の取組と、その取組の中で見えてきた課題について、当該館の学芸員の視点から紹介する。

1．西南学院大学博物館の沿革・使命・特色

福岡県福岡市の西新に所在する西南学院大学は、1916（大正 5）年にプロテスタント諸派の一つであるバプテスト Baptists に属する米国南部バプテストの宣教師 C. K. ドージャー（Charles Kelsey Dozier, 1879–1933）によって創立された私立西南学院（旧制中学）にルーツを持つ大学である。西南学院大学の附属施設として 2006（平成 18）年に開館した西南学院大学博物館（ドージャー記念館）は、現存する西南学院最古の建築物でありヴォーリズ建築[4]としても知られている西南学院旧本館・講堂（福岡県指定有形文化財）を、1921（大正 10）年竣工当時のすがたに復元しつつ、博物館として改修した施設である。そのため、この大学博物館は、博物館としては比較的新しい存在でありつつ、建築物としては博物館よりも遥かに長い時間の積み重ねを持っているという、いわば二重の歴史に彩られたミュージアムとなっている。

西南学院大学博物館の経営理念（使命）は、「キリスト教主義教育という建学の精神にもとづき、具体的なモノ（博物館資料）をとおしてキリスト教文化の理解を深めることで、学生の教育に取り組み、その成果を学内のみならず地域社会にも発信する」[5]というものであり、この理念に即しつつ、来館者に求められているニーズ、大学博物館としての役割、時代の要請等を考慮して、四つの具体的な目標が事業の基本的な指針として設定されている。その四つとは、①「キリスト教文化の研究と展示」、②「博物館教育の支援と推進」、③「地域社会への発信と貢献」、④「現代社会への共感と提言」である[6]。また、目標として明文化されているわけではないが、上記の歴史的背景ゆえに建物や学院の歴史に関心を持って来館する市民も多いため、建築の魅力と学院の歴史を感じてもらうことも運営の基本コンセプトとして意識するようにしている。これらの使命・指針・コンセプトに即して、西南学院大学博物館は展示のみならずワークショップや市民講座、学術シンポジウム等、さまざまな活動に日々取り組んでいるところである。

キリスト教文化の教育・発信を事業の核としているというだけでも日本のミュージアムとしては大いに個性的だと言えるが、西南学院大学博物館の事業には更に個性的な特色がある。それはすなわち、「キリスト教の諸教会（教派）の文化を幅広く扱っていること」である。事実、西南学院大学博物館はこれまでにカトリック（および

キリシタン）・正教会・プロテスタント諸派（特に西南学院大学のルーツであるバプテスト）のそれぞれに注目し、さまざまな企画を立案・実施してきた。特に博物館事業の要たる展示事業においては、テーマや資料が一つの教派に偏りすぎないよう、バランスを強く意識してきた。もっともこの特色は、使命や指針のような、その博物館が一貫して目指すべき方向性として設定されたものではなく、いわば組織文化として学芸系職員の間で継承されてきたものに過ぎない。その意味で、いつ失われてもおかしくない不安定な特色ではあるが、しかしながら、この特色こそが、他のキリスト教文化を扱う博物館と比較して尚西南学院大学博物館が個性的であると断言できる要素になっていると報告者は考えている。そのため、同博物館の学芸員として勤務してきた報告者は、この特色を最大限意識しながら、さまざまな展示事業に取り組んできた。

以下の項では、上記の特色を反映した展示の取組事例、および取組の中で報告者が気づいた課題についてそれぞれ紹介する。

2. 展示の現状―これまでの取組事例―

諸教会の文化を幅広く扱うという特色は、西南学院大学博物館の常設展示と特別展示（特別展・企画展）[7]の双方に反映されている。常設展示については、展示室の細かなレイアウトや展示資料の内容・点数が年に複数回のペースで入れ替わっている

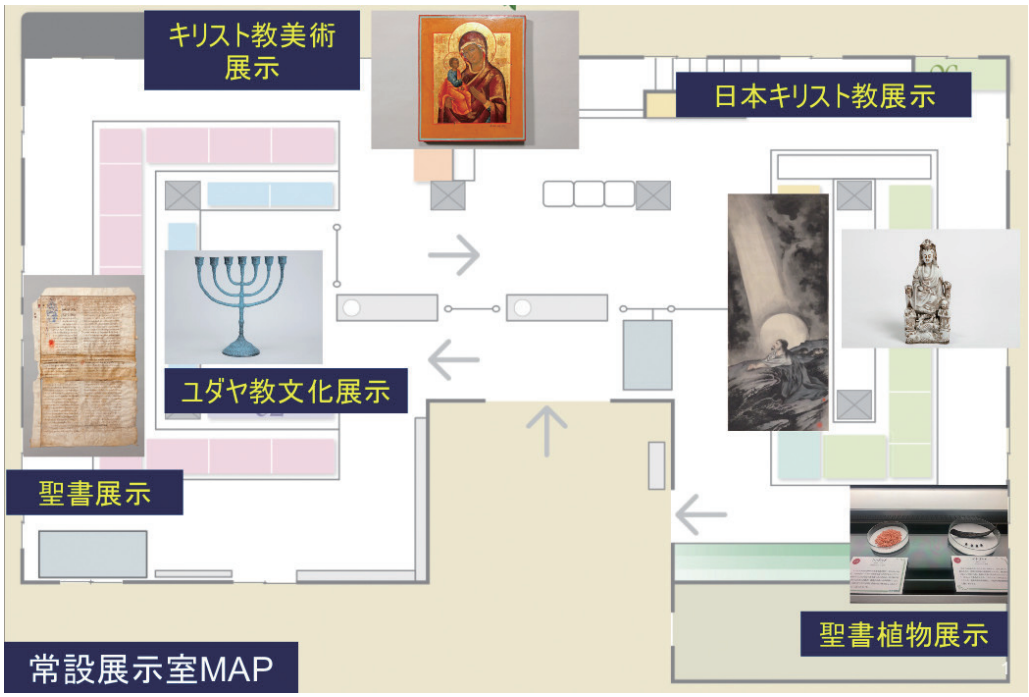


図１　常設展示室の展示構成（報告者作成）

ものの、展示構成の大枠は一貫しており、「ユダヤ教文化展示」「聖書展示」「キリスト教美術展示」「日本キリスト教展示」「聖書植物展示」が基本構成となっている（図１）[8]。この構成の中で、「キリスト教美術展示」として設定されている区画では、カトリック文化圏の装飾写本や聖画、正教会のイコンなどが展示されており、主にカトリック・正教会の文化を学ぶことができる。これに対して、「日本キリスト教展示」では、キリスト教の到来・禁教を紹介したのち、開国およびキリスト教解禁後の動向を紹介する区画において、幕末から明治期にかけてのカトリックの再布教やプロテスタントの宣教活動およびその影響がわかる資料の展示をおこなっており、カトリック・プロテスタントの諸相を日本史の文脈で学ぶことができる。このように、すべてを平等に満遍なく扱えているわけではないが、少なくともカトリック・正教会・プロテスタントという大きな区別があることは常設展示を通じて知ることができるように構成されている。

また、常設展示と特別展示の中間的な位置付けとして、西南学院大学博物館では「テーマ展示」や「博物館ニュース展示」という展示も実施している。テーマ展示は、常設展示室の一区画を使用して、同一テーマに基づく資料数点を期間限定で展示するという企画であり、普段展示していない資料の公開や学芸系職員（特に学生アルバイトである学芸調査員）の実践的教育といった狙いがある。諸教会の文化の展示という文脈で言えば、この種の企画展示には常設展示で偏っている教派のバランスを一時的に矯正できるという効果があり、実際これまで実施してきたテーマ展示の中にはそのような狙いで企画・実施されたものもある。博物館ニュース展示は、西南学院大学博物館で年に３号発行している『西南学院大学博物館ニュース』[9]の所蔵品紹介特集で取りあげた資料の実物を常設展示室内で展示するという企画である。実現までの準備プロセスは異なるものの、展示の性質的には上記の「テーマ展示」とほとんど同じであり、この展示にも常設展示では普段見ることのできない資料が展示できるという同じ利点がある。しかも『西南学院大学博物館ニュース』の所蔵品紹介は、それ自体特定の教派やジャンルの資料ばかり紹介しないことを基本コンセプトとしているため、「博物館ニュース展示」においても同様に教派の偏りを解消するという効果が期待できる。これらの小規模展示企画は、担当する職員にとっても負担があまり大きくないため、バランスの偏りを比較的手軽に修正できるというのが最大の長所である。したがって、これらの展示企画については、その長所を自覚しつつ、今後も積極的に活用していくべきであると報告者は考えている。

上記のような期限付きの展示企画や展示資料の入れ替えによって多少の調整は可能であるものの、展示構成の基本構成が変わらない以上、常設展示室で展示することのできる資料のバリエーションや点数にはどうしても限界がある。たとえば、そもそもの展示室の構成が宗教改革やプロテスタント諸派の教義・歴史を紹介することを

主眼としていないゆえに、西南学院大学博物館の常設展示室でプロテスタントについて——総合的にであれ特定の教派についてであれ——詳しく紹介することは困難である。しかし宗教改革は、キリスト教の歴史を知る上で、とりわけカトリックとプロテスタントの歴史を知る上で、決して無視することのできないトピックの一つである。このような、常設展示が対象にしていない、けれども諸教会の文化を幅広く紹介するためには避けて通れないテーマについて展示をする際に活用されるのが、常設展示室と文脈を切り離せて且つ特定のテーマを大々的に取りあげることのできる特別展示である。

西南学院大学博物館の特別展示がいかに「教派のバランス」を意識しているかが分かる例として、2018 年度から 2019 年度にかけて実施された展示企画の一覧[10]（下記）を見てみたい。

2018 年度企画展	地下墓地カタコンベの世界［**カトリック**］
2018 年度企画展	東方キリスト教との出会い：祈りのかたちとその拡がり［**正教会**］
2018 年度特別展	キリシタン：日本とキリスト教の 469 年［**カトリック（キリシタン）**］
2018 年度企画展	宗教改革と印刷革命［**プロテスタント（特にルター派）**］
2019 年度企画展	ねこ学への招待［**非キリスト教的テーマ**］
2019 年度特別展	明治日本とキリスト教：蒔かれた種［**プロテスタント・カトリック**］
2019 年度特別展	聖母の美：諸教会におけるマリア神学とその芸術的展開［**諸教派**］
2019 年度企画展	文化財とともに生きていく：ドージャー記念館 次の 100 年に向けて［**学院史**］

この一覧から明らかなように、2 年間計 8 回の展覧会において、カトリック･正教会･プロテスタントのすべてが一度は中心テーマに設定されており、且つ一つの教派が連続して中心テーマに設定されることもなかった。また、教派の多様性という観点からとりわけ象徴的なのは、2019 年度特別展「聖母の美：諸教会におけるマリア神学とその芸術的展開」である（**図 2**）。この特別展は、報告者自身が企画・担当した展覧会であり、企画の意図からして、現在の主題である「諸教会の文化を幅広く扱うこと」を一つの展覧会として実現・可視化することが主眼であった。テーマを広く設定しすぎたため結果として各教派の紹介がごくごく簡潔なものになってしまったという反省はあるものの、西南学院大学博物館の特色を内外に明示するという意味で、実施する必要も意義もあったと報告者は考えている。

図２　特別展「聖母の美」展覧会リーフレット（外〔上図〕・内〔下図〕）

残念ながら、2020年度以降は、コロナ禍や学芸系職員の退職･交代等の事情により、この2年間と同程度のテーマ・バランスを保つことはできなくなってしまっている。とはいえ、バランスに対する意識自体が失われたわけではなく、展覧会のテーマが偏ってしまった場合は常設展や他の企画で調整するという方向で考えており、常設展単位･特別展単位でバランスを意識するのではなく（実現できればそれは一つの理想ではあるが）西南学院大学博物館の事業の総体で可能なかぎりバランスを取る、というのが現在の考え方である。

3. 展示の課題―キャプションにおける用語・訳語の選択をめぐって―

さまざまな教派の文化をテーマとする展示企画を実施してきた中で報告者が気づいた一つの大きな課題は「用語・訳語」の問題である。日本において一般に知られているキリスト教の用語・訳語の多くはカトリックのそれであり、それと同等ないし次点でプロテスタント（「牧師」など諸派で共通の用語の場合）となっており、正教会の用語･訳語はほとんど知られていない。たとえば、イエス・キリストの母マリアをどのような称号で呼ぶか、また日本語に翻訳するかは教派によって異なっており、カトリックでは「聖母」の称号がしばしば用いられるのに対して、プロテスタント諸派では聖母の称号は使用されない傾向にある。しかし「マリア」という人名表記は双方に共通している。これに対して正教会では、「生神女（しょうしんじょ）」という称号が一般的であり、人名表記も「マリヤ」とされている[(11)]。したがって、正教会の用語・訳語としては「生神女マリヤ」と表記するのが正式（一般的）なのであるが、この表記をキリスト教関係の書籍や印刷物で見たことがある人はほとんどいないであろう。

このような用語・訳語の偏りの原因は、日本とキリスト教の歴史的関係もさることながら、各教派の信徒数、すなわちマジョリティかマイノリティかに依るところが大きい。文化庁統計『令和3年度 宗教年鑑』[(12)]によれば、令和2年度のカトリックの信徒数は524,338人、プロテスタント（諸教派の総計）の信徒数は506,572人、そして正教会の信徒数は8,991人となっている。つまり、正教会は現代日本においてマイノリティであるがゆえに、その中で使用されている用語・訳語も一般に知れ渡っていないのである。

正教会がマイノリティであること、それゆえに正教会の用語・訳語が一般的ではないのは如何ともしがたい事実であるとして、問題となるのは、この「一般的ではない」用語・訳語を博物館の展示へいかに取り入れるか、という点である。多様性の時代において求められるべき教育の方法は、それぞれの文化を尊重し、言及する際は可能なかぎり元の文脈を保つことである。現在の主題に即して言えば、各教派の文化について解説する際には用語・訳語もその教派のものを使用する、という態度が原則として

博物館には求められる。ではそれは現実的に可能なのかと問われれば、可能な場合もあれば非常に難しい場合もある、というのが報告者の率直な所感である。

一つの教派だけに絞って特集している特別展や企画展、あるいは解説のための紙面を大きく確保できる媒体（ポスター展示など）の場合には、各教派の用語・訳語の別はそれほど問題にならない。たとえ一般的でなくても、丁寧に解説すれば良いからである。しかしながら、常設展示においては事情が大きく異なる。先に示したように、西南学院大学博物館の常設展示は、一つの展示室の中に複数の教派の関連資料が混在するという構成になっている。展示によっては、教派の文化の違いを明瞭にするために、異なる教派の類似したテーマの資料を並置することもある。それでは、このような展示構成において「各教派の文化について解説する際には用語・訳語もその教派のものを使用する」という原則を厳格に適用した場合、キャプションはどうなるだろうか。可能性は二つ考えられる。一つは、狭い余白・小さいフォントサイズで用語・訳語について事細かに補足解説されているキャプションになるという可能性。いま一つは、特に説明もなく新出の用語・訳語が頻出するキャプションになるという可能性。

エルサレムスカヤの生神女

Theotokos of Jerusalem

1816年／ロシア／板にテンペラ、金箔

本資料は生神女マリヤを主題にした「エルサレムスカヤ（エルサレム）の生神女」と呼ばれるタイプの正教会のイコンである。背景に金箔を用いており、すりつぶした顔料を卵黄で溶いたテンペラ絵具で彩色する伝統的な技法で描かれており、銘文や生神女の衣には優美な装飾描写が見られる。本資料は2020年に修復し、一部剥落箇所が補彩されている。

時禱書零葉「受胎告知図」

Book of hours (Page of "The Annunciation")

1500年頃／ヨーロッパ／羊皮紙に活版・木版、彩色、金箔

15世紀末頃に出版された初期活版印刷本（インキュナブラ）の断片。時禱書と呼ばれる祈禱書の一種であり、聖母マリアへの祈りの箇所の挿絵であると考えられる。画面を装飾する金箔は、聖母を中心として図像全体を輝かせており、聖霊から聖母へ注がれた神の光の充溢を表現しているかのようである。

図３　各教派の用語・訳語に即したキャプションの例
上は正教会、下はカトリックの用語･訳語を採用しており、下線部分が該当箇所である。

言うまでもなく、どちらも博物館のキャプションとして望ましいスタイルではなく、来館者の混乱を招く結果となるだろう（図3）。そのため、西南学院大学博物館では、現状、先の原則を厳格に適用するということはしていない。

次善の策として現在採用しているのは、各教派の文化が誤解されないよう配慮しつつ、基本的にはマジョリティであるカトリックの用語・訳語を使用する、という方針である。たとえば図3は、それぞれ正教会とカトリックにおいて一般的な用語・訳語を忠実に採用したキャプションの例であるが、キリスト教についてほとんど知識を持たない人は元より、キリスト教の信者や研究者でさえ、正教会との接点がなければ、上側の正教会の用語・訳語が使用されたキャプションを見て困惑する可能性が高い。それゆえ、実際には、上側の資料のキャプションは「生神女」を「聖母」に、「マリヤ」を「マリア」に変えたものを採用している。

むろんこのやり方を採用したのは、それによって正教会の信仰・文化の要点が誤解される可能性は低いと判断したからである。また、こういった方法を採る場合は、博物館ニュースや研究叢書といった紙面を大きく確保できる別の媒体で用語・訳語について解説することで可能な限りフォローするようにもしている[13]。もっとも、先に「次善の策」と言ったように、報告者自身これが最良の解決策だと考えているわけではない。これはあくまでも当代の学芸員である報告者が思いついた現実的な「妥協案」であり、さしあたり採用されている事例に過ぎない。したがって、この問題については、今後も試行を繰り返し、他館の事例も調査することで、より良い解決策を見つけなければならないと考えているところである。

おわりに

本稿では、「教派の多様性」という観点から、西南学院大学博物館の展示事業について、現在の取組事例とその課題について紹介した。一つの教派に限定せず複数の教派について紹介するという試みは、文化と宗教に関わる時代の流れを色濃く反映しており、西南学院大学博物館の個性的な特色でもあるため、今後も継続していくのが望ましいと考えられる。しかしこの試みを継続していくということは、用語・訳語をどう選択していくかという課題とも向き合い続けなければならないことを意味している。遺憾ながら報告者自身は自他共に納得させられるような解決策を考案することができていないが、西南学院大学博物館には学芸員以外にも多くの学芸系職員が在籍しており、また職員の入れ替わりもあるので、今後の変遷の中でいつかより良いアイデアが生み出されるだろうという楽観的な期待を持っている。

また、本報告では用語・訳語にのみ課題の内容を絞ったが、「教派の多様性」に関して今後考えなければならない課題は他にも沢山あることを付言しておきたい。

たとえば、博物館の展示で紹介する教派をどこまで拡大するか（拡大できるのか）という課題は、既に館内で表面化している問題である。本報告ではカトリック・正教会・プロテスタントという大枠で教派の別を語ったが、プロテスタントは西方教会にルーツを持つカトリック以外の複数の教派の単なる総称に過ぎず、正教会も同様に総称的な枠組みでその中に複数の異なる文化を持つ諸教会が存在する。前二者に対してカトリックは統一された教派なので安心かと言えば、カトリック内の多様性やカトリックが異端・異教としているキリスト教的グループをどう扱うかというまた別の問題がある。もちろんこれらのすべてを細分化して個々に取りあげることは、現実的に考えて不可能である。企画の数が膨大になるという点からしてもそうであるし、職員の能力（専門性）がすべてをカバーするにはあまりに微力である。

したがって、用語・訳語の問題にしても、扱う教派の拡大・細分化という問題にしても、理想は理想として、現在の職員には何がどこまでできるのかという現実的な視点を、私たち現場の職員は常に持っておく必要がある。しかしその現実的な視点を失わないで日々改善に取り組み続けていれば、博物館の展示は少しずつでも良いものになっていくはずであるし、10 年後、20 年後には報告者には想像もつかなかったような地点へと到達できるはずである。そのような未来への期待を以て、本稿を締めさせていただく。

注

（1） 文化の多様性に関しては、2001 年のユネスコ総会において採択・宣言された「文化的多様性に関する世界宣言 Universal Declaration on Cultural Diversity」が象徴的である。同宣言はユネスコのホームページ（下記 URL）を参照。
https://en.unesco.org/about-us/legal-affairs/unesco-universal-declaration-cultural-diversity
（最終閲覧 2023 年 10 月 30 日）

（2） 教派を超えて一致を目指す運動自体はさまざまな時代・地域に見られるものであるが、現代の全世界的なエキュメニズムに関しては、1910 年にエディンバラで開催された世界宣教会議がその嚆矢とされている（『岩波キリスト教辞典』岩波書店、2002 年、「エキュメニズム」の項を参照）。

（3） 本稿は國學院大學研究開発推進機構日本文化研究所主催の令和 4 年度国際研究フォーラム「ミュージアムでみせる宗教文化」（2022 年 12 月 11 日開催）における口頭発表「キリスト教展示の現状と課題：諸教会の文化をいかに展示するか？」の内容を加筆修正し報告書として再編したものである。

（4） 「ヴォーリズ建築」は、明治期から昭和にかけて活躍した伝道建築家ウィリアム・メレル・ヴォーリズ（William Merrell Vories, 1880–1964）および彼の建築事務所が手がけた建築群を指す。ヴォーリズ建築は日本各地に数多く現存しており、西南学院旧本館・講堂のように文化財に指定されているものも少なくない。

（5） 西南学院大学博物館ホームページ「使命と沿革」（下記 URL）を参照。
http://www.seinan-gu.ac.jp/museum/about/index.html（最終閲覧 2023 年 10 月 30 日）

（6） 同上。

（7）「特別展」と「企画展」の区別は博物館によって異なるが、西南学院大学博物館では主に展覧会事業の規模・予算に即して、規模・予算が大きいものを「特別展」、比較的小さいものを「企画展」としている。

（8）常設展示室の構成・主な展示資料については「博物館パンフレット」を参照（ホームページよりダウンロード可）。本文に図を掲載している常設展示室とは別に「ドージャー記念室（学院史展示）」も常設展示コーナーの一つとして西南学院大学博物館内に設置されている。

（9）『西南学院大学博物館ニュース』が1年に3号ずつの発行になったのは2017年度からであり、2009年度の創刊から2016年度までは1年に4号ずつ発行していた。

（10）本一覧は「企画展・特別展」に限定したリストであり、この他にも同期間には多数のサテライト展示やテーマ展示といった小展示企画が実施された。事例のサンプルが多くなりすぎるため本論では割愛したが、それらの小展示企画においても「教派の多様性」や「なるべく多くのテーマを扱う」といった意識は反映されていたことを付言しておく。

（11）本文に挙げたイエスの母マリアの称号は一例であり、カトリック・正教会には「聖母」や「生神女」以外にもさまざまな神の母の称号がある。また、プロテスタントと一言に言っても多くの教派・立場があり、イエスの母マリアについての認識も多様であるため、プロテスタントに分類される教派のすべてが聖母の称号を否定しているわけではない。

（12）文化庁宗務課による統計「宗教年鑑」は文化庁ホームページ（下記URL）よりpdfをダウンロードできる。
https://www.bunka.go.jp/tokei_hakusho_shuppan/hakusho_nenjihokokusho/shukyo_nenkan/index.html（最終閲覧：2023年10月30日）
なお、プロテスタントの信徒数については、カトリックと正教会以外のすべてのキリスト教系団体の信徒数の合計とした。

（13）図3で例に挙げた「エルサレムスカヤの生神女（聖母）」は、展示室のキャプションではカトリックの用語を使用しており特に補足説明もしていないが、『西南学院大学博物館ニュース』第47号（2022年12月号）の所蔵品紹介では、「聖母」という称号の補足として、正教会の称号である「生神女」や「至聖女」にも言及している。

強制収容所内の信仰と宗教
―アメリカの日系人博物館を通して考える日系人の多様な宗教経験―

エミリ・アンダーソン
（全米日系人博物館　学芸員）

はじめに

企画展、「経と聖書：信仰と日系アメリカ人の第二次世界大戦中の強制収容 Sutra and Bible: Faith and the Japanese American World War II Incarnation」はロサンゼルスにある全米日系人博物館で 2022 年 2 月 26 日から 2023 年 2 月 19 日まで博物館と南カリフォルニア大学伊藤真聰日本宗教･文化研究センターの共同企画として開かれた。

ロサンゼルス中心のビジネスマンや元アメリカ兵の日系二世が協力して、1992 年に設立した全米日系人博物館は、開館以来一般来館者に日系史、特に収容所経験、を通して日系人の存在、差別経験、アメリカへの貢献、そしてまたアメリカの民主主義が掲げる多様性と、その危うさなどを訴えてきた。展示と共に何十万もの史料が保管されている。史料は個人の日系人が寄贈した一般移民の持ち物が主で、忘れられてしまった人の歴史―余白（マージン）に置かれた人たち―を重要視している。

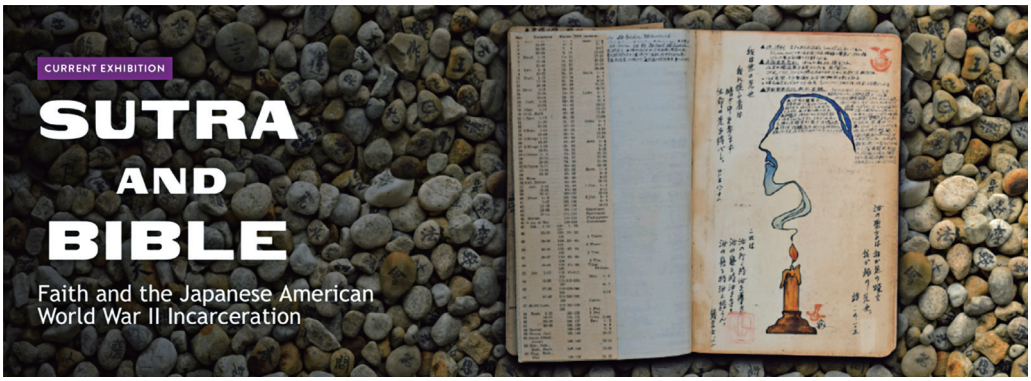
全米日系人博物館

宗教をどう（なぜ）展示のテーマにするか

博物館では真珠湾攻撃から収容所に至る過程を、何度も、いろいろなテーマを通して展示してきた。しかし、宗教に注目するのは今回が初めてであった。様々な展示の経験を持ち近代日本キリスト教研究を専門とする当館学芸員エミリ・アンダーソンと、仏教史が専門で日系仏教徒コミュニティーとの関わりが深いダンカン隆賢ウィリアムズ（南カリフォルニア大学教授、同大学伊藤真聰日本宗教・文化研究センター、ダイレクター）が、協力しながら、日系人にとっての宗教の重要性や、どういった「もの」（史料）が存在し、どのように宗教の儀式や教えをうまく来館者に伝える事ができるかを考えた。さらに、ウィリアムズが長年の研究や調査を重ねて出版した、日系仏教徒の収容所経験に焦点を合わせた書籍『アメリカン・スートラ：第二次世界大戦における信仰と自由の物語 *American Sutra: A Story of Faith and Freedom in the Second World War*』の成果をも用いながら、展示のプランを検討し、構成した。

今では第二次大戦中に西海岸在住の日系アメリカ人おおよそ12万人（うち3分の2がアメリカ市民）が、内陸部に築き上げられた収容所に監禁され、その「容疑」は日本人を先祖に持つ事以外何もなかった事は紛れもない事実とされている。何故日系人だけがこのような圧倒的で差別的な制度の対象になったのか――例えば同じく敵国であったドイツ系やイタリア系のアメリカ人の扱いは異なっていた。そこには様々な要因があり、宗教もまた一つの重要な要因であったが、そうであるにもかかわらず、これまで十分に注目されてこなかったといえる。また、このことは、“信仰の自由”を憲法に定め、これを根本原則として掲げながらアメリカの民主主義を唱えるアメリカ人からしてみれば、理想を覆す、あってはならない差別にあたることになる。

日系人口の大多数が仏教徒であった事は差別の理由にもなった。信仰の自由が憲法で定められても、一般的にはアメリカはプロテスタント・キリスト教の国とされ、



「経と聖書」展の掲示用イメージ

南ヨーロッパやアイルランドのカトリック系移民でさえ相応しくないと思われがちであった。黄色人種で仏教徒の日本人移民は何をしても同化が不可能な人たちとされていた。日系移民のように白人でもなく、マイノリティ宗教を「信じる」マジョリティの移民コミュニティがアメリカに現れる際、多民族・多文化・多宗教を理想として掲げるアメリカが耐えられるか。第二次世界大戦の日系人の経験、そしてその中での宗教の関わりを辿っていく事によって、日系人にとって宗教という概念の重要性、さらに宗教や「信仰」を巡る文化的・政治的価値観の働きを探る機会が与えられる。かつ、日系アメリカ人のこの辛い経験を振り返ることは、戦争のような危機的状況において、いかに多様な人種、多様な宗教の共存を守り通し、いかに権利の平等という理想を遂行できるのかという、きわめて今日的で現実的な課題を、真剣に考えることにもつながっているのである。

移民にとっての宗教の役割

明治時代に移住した大多数の日本人は仏教徒であったが、日本で暮らしていたときには、自覚的に仏教に対して宗教的な信仰を持っていたというよりは、家族や村が行う行事や儀式、葬式や先祖祭祀を行い、あるいはご利益を願うなどといった形で、仏教と関わっていたと考えられる。しかし、渡米すると異文化・異宗教を持つ者として差別を受けるようになり、今まで頼りにしていた親族やコミュニティと遠く離れた状態において、宗教団体が与える物質的・精神的な支えを求めるようになった。すでに日本に宣教師を送っていたアメリカのキリスト教の教派が、アメリカ西海岸に集まり出した日系移民むけの伝道や物質的な支援を開始し、さらに日本から日本人のキリスト教の牧師が移民を追うように渡米して移民用の教会を設立するようになり、説教や伝道だけでなく英語学校や下宿など、移民が必要とするサービスを提供し始めた。仏教の各宗も、後から移民の依頼を受けて開教師を送るようになり、特に葬式など不可欠な行事を執り行い、また日本政府との連絡など重要な役割を果たすようになった。初期の移民は、出稼ぎや留学を目的として、短期間滞在する予定でいた男性が主だったが、より長く滞在する事になった人たちが日本から嫁を呼び寄せるようになり、後にはアメリカ市民権を持つ子供たちが生まれるようになった。この「二世」は人種差別を受けながらも他のアメリカ人の子供同様に学校に通い、ボーイスカウトやガールスカウトに参加し、ほとんどが英語しか話せないアメリカ人として育った。二世の数が増えるにつれて、宗教団体の側も変化の必要性を自覚するようになり、英語の礼拝や日曜学校を始めたり、地域中の二世が同じ宗教の若者と集まれる団体などを立ち上げた。

このような歴史を展示で伝えるためには目で見て内容を分かりやすく伝える写真や

史料を必要とする。例えば下掲のように独特な建築の教会や寺院、また印象的な集団写真を選んだ。

奥村多喜衛が設立したハワイ州ホノルル市にあるマキキ教会
写真：Courtesy of Mitch Homma

本派本願寺ハワイ別院、ホノルル市
写真：Courtesy George Tanabe

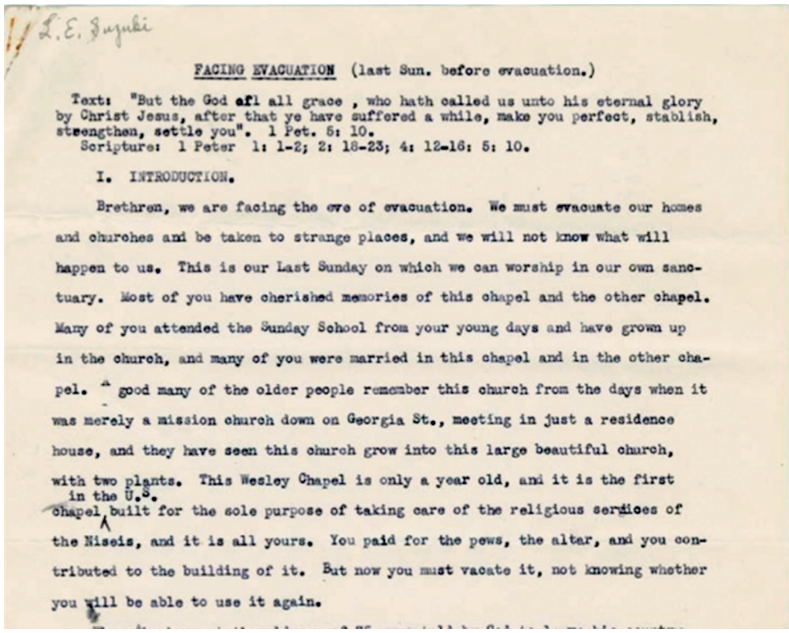
Japanese American Young People's Church Annual Conference, Berkeley, California, 1939.
Photo: Japanese American National Museum, Gift of Rev. Sadaichi Asai (2000.354.7)

本展示に特有の課題

展示は本と違い、良い「物語」が存在しても、それを物質的に表す「もの」が存在しないと伝えられる内容が限られてしまう。例えば「経と聖書」という本展示のタイトルから明らかなように、この展示では主に仏教とキリスト教に注目した。もちろん、実際には天理教、金光教など他の宗教の信者も移民の中にいた。しかし、一般のアメリカ人の来館者に対しては、前提として天理教や金光教がどのような宗教であるのかを丁寧に説明する必要がある一方で、展示スペースには限りがある。このため、来館者が多少なりとも知識を持っているであろう仏教とキリスト教に焦点を合わせた展示とすることにした。

さらに展示のテーマを宗教に絞るとさらに展示範囲が難しくなる。例えば宗教の儀式や集まりは何かを見るだけでなく、説教を聞く、お経を読む、讃美歌を歌う、お香を焚く、といった行為をも伴うものであり、固定された展示物だけでは伝わらないものがある。宗教、また宗派の違いによって存在する史料の「面白さ」の違いも現れてくる。豪華な建物を持ち、法衣や祭服に身を包んだ僧侶・神父が、様々な道具を用いて儀式を執り行うカトリック教会や仏教と比べて、装飾を意図的に避けるプロテスタント系のキリスト教会とでは、来館者の目を引く展示できる「もの」の質が大きく異なってくる。

博物館の書庫に寄贈された貴重な史料として、プロテスタント教会の牧師たちが当時の試練にどう対応したかを表すものがある。例えば強制立ち退き直前の日曜礼拝で行われた説教の原稿である。しかし、それらは、全てタイプされた活字の原稿で、一見して目を引くようなものではない。展示してもケースの隣まで寄って原稿を読んでみないと重要性がわからない。さらに言えば、説教は読むものではなく、聞くものである。こうしたことを考え、説教を書いた牧師たちの子孫らと連絡が取れたので、合計四人の牧師たちが書いた説教を朗読してもらって録音し、その録音を再生することによって、この「もの」を展示した。



L.E. Suzuki

FACING EVACUATION (last Sun. before evacuation.)

Text: "But the God of all grace, who hath called us unto his eternal glory by Christ Jesus, after that ye have suffered a while, make you perfect, stablish, strengthen, settle you". 1 Pet. 5: 10.
Scripture: 1 Peter 1: 1-2; 2: 18-23; 4: 12-16; 5: 10.

I. INTRODUCTION.

Brethren, we are facing the eve of evacuation. We must evacuate our homes and churches and be taken to strange places, and we will not know what will happen to us. This is our Last Sunday on which we can worship in our own sanctuary. Most of you have cherished memories of this chapel and the other chapel. Many of you attended the Sunday School from your young days and have grown up in the church, and many of you were married in this chapel and in the other chapel. A good many of the older people remember this church from the days when it was merely a mission church down on Georgia St., meeting in just a residence house, and they have seen this church grow into this large beautiful church, with two plants. This Wesley Chapel is only a year old, and it is the first chapel in the U.S. built for the sole purpose of taking care of the religious services of the Niseis, and it is all yours. You paid for the pews, the alter, and you contributed to the building of it. But now you must vacate it, not knowing whether you will be able to use it again.

Rev. Lester Suzuki sermon

収容生活

果物クレートから作られた仏壇

収容所に集められた日系人は、最低限の生活を維持するものしか与えられず、それ以上のものは自分達で作るか、探すかするより他に手段はなかった。あっという間に全てを失った人たちにとって、安定感のある生活をどう取り戻すかが第一課題だったと言えよう。この中で、宗教団体は欠かせない存在であると同時に、その宗教の教えは、突如として混乱した世界に投げ込まれた人びとに、僅かな慰めを与えたであろう。

牧師や僧侶が、収容所内での教会設立許可を貰い、毎週の礼拝や日曜学校、さらに結婚式や葬式など重要な行事を行なった。また、素人仕事によって、捨てられた木屑などから仏壇、神棚、十字架など信仰のためのものを作成した人びともいた。

マンザナー収容所の仏教会で行われた葬儀

ハートマウンテン須弥壇

収容所内で作られた仏壇が幾つもある中、その大きさや技術で目立つ「もの」がある。それはワイオミング州ハートマウンテン収容所で、宮大工であった西浦兄弟が作った須弥壇であり、収容所の仏教会で使うために合計４台が作られた。博物館に寄贈され、展示された須弥壇は、戦後、カリフォルニアの仏教会で長年使われていたものである。

ハートマウンテン須弥壇

「経と聖書」

様々な貴重な史料が展示された中で、特に焦点を当てた「もの」が、本展示のタイトルにもある「経」と「聖書」を代表する「ハートマウンテン経塚」と「北地聖書」である。両方とも収容された日系人が厳しい環境の中で知恵を絞り、信仰を深めるために作ったものとされる。さらに両方とも永久に失われそうになり、奇跡的な偶然の

お陰で見つかり、保存される事になった。

仏教を代表した「経」は謎に包まれたものであった。第二次世界大戦が終わり、強制収容所が閉鎖された後、そこに建てられていたバラックや土地が買収された場合があった。ワイオミング州の元ハートマウンテン強制収容所だった土地も買収の対象になり、墓地だった部分がボヴィー夫妻の手に渡った。畑にするために機械で土地を整地していたところ、いきなり機械が何かにぶつかった。作業員が機械から降りて見てみると、石油などを貯蔵するためのバレルが地中にあり、その中に入っていた何百個もの石の一つ一つに、墨で漢字が書かれていたのである。戦時中にそこで日系人が収容されていた事を知っていたボヴィー氏はバレルごとその石を掘り出し、不思議に思いながらガレージに移した。何十年もこの「謎の石」はそのまま彼のガレージに静かに保管された。以前収容されていた人たちが自分の経験をもっと知ろうと何十年ぶりに当地を訪れるようになり、ボヴィー夫妻と親しくなり、夫婦はその人たちに石を分けた。1990 年代にロサンゼルス在住の日系人がハートマウンテンで使われて、まだ残っていたバラックを購入し、これをロサンゼルスに移設するために当地を訪れた際、ボヴィー氏は何百個と残っていた「謎の石」を、1992 年に設立されたばかりであった全米日系人博物館に寄贈する決意をし、バラックの板と一緒に石はワイオミングを去った。「謎の石」（Heart Mountain Mystery Stones）はバラックと一緒に展示され、レプリカが博物館の売店で売られるようにもなった。

ハートマウンテン経塚

2001 年に、愛知学院大学の森祖道教授（現在は同大学名誉教授）が、偶然ロサンゼルス在住の娘を訪問中に博物館を訪れ、「謎の石」を見た瞬間に、これは経塚ではないかと思い、その後何年もかけてこの謎を解く研究に挑んだ。博物館に寄贈された 656 個の石に書かれている漢字を全て記録に取り、コンピューターによるデータ解析を専門とする同僚の助けを得て検討したところ、この石一つ一つに書かれた漢字が法華経に当てはまる可能性が強いと分かった。謎をさらに解く鍵が収容されていた人たちから発見された。その中に日蓮宗の僧侶であり、ハートマウンテンの書道教室を指導した村北日鑑という人物がいたのである。森教授の何年にもわたる丹念な調査の結果、この謎の石の正体が判明した。以前の展示とは違って、今回の展示ではこれらの石を、宗教心の表れとして作成された経塚として紹介することができたのである。

特に焦点を当てた聖書も特別な歴史を持つ。後に救世軍の小隊長となる北地満寿夫は、和歌山県出身の移民で 1915 年、18 歳で渡米。先に移住した父の店を手伝いながら学校に通った。最愛の妹の病死がきっかけで一時期失望し、酒に溺れて交通事故で重症を負った事が人生の分岐点になった。事故の現場に偶然居合わせた救世軍の人に励まされ、自分も救世軍に入団する決意をした。オークランドやサンノゼで二か国語伝道を行う過程で二か国語の聖書の必要性を感じ、自分で作成する決意をした。英訳が片方に印刷された聖書に日本語訳を手書きで加え、こまめに説明やイラストなども

北地聖書

足した。北地は1935年頃にこの作業を開始し、戦争が勃発して、アリゾナ州のボストン収容所に収容されても作業を続け、1944年に完成させた。戦後さらにもう一冊の聖書の制作を手掛け、亡くなる1973年まで作業を続けた。

その後、何十年もこの2冊の聖書の行方はわからないままだった。2017年にリサイクル用のゴミ箱に捨てられているのが発見され、オークションにかけられる寸前に親族に知らされた。オークション店との交渉などを経て、聖書は親族の希望によりスタンフォード大学のフーバー・コレクションに寄贈されることになった。

アマチ慰霊塔・慰霊碑

亡くなった人の霊を祀るという大切な仕事を収容所でどう行うか。収容所の閉鎖を迎えたコロラド州のアマチ収容所の住民は、その地で命を失った者、さらにそこから出兵し戦場で亡くなった日系兵士が忘れられないように、慰霊塔と慰霊碑を残した。慰霊塔に書かれた字は和田正彦牧師が手掛けた。

最後に、展示の一部として作成された「慰霊壁」を紹介したい。展示された史料の一つに、戦時中ハワイで一人残っていた日本人の開教師がハワイ出身の二世戦死者のために作った塔婆があった。この塔婆を見た展示のデザイン担当者が、収容所や抑留所の名前が書かれている塔婆で出来た「慰霊壁」の作成を提案した。博物館の近くに

アマチ慰霊塔

ある禅宗寺の小島秀明師に塔婆の作成を依頼し、日系人が戦時中収容された30ヶ所の施設を慰霊する慰霊壁が完成した。来館者の多くは日系人で、自分、または親族が収容された施設の名前を探し、その前で写真を撮るなどしており、この展示のために作られた塔婆の「慰霊壁」も大きなインパクトがあった。

アマチ慰霊碑

慰霊壁

アイヌ文化展示が照らす日本・東アジアの宗教

北原　モコットゥナシ
（北海道大学アイヌ・先住民研究センター　准教授）

はじめに

2008年に、アイヌ民族を先住民族とする国会決議が可決されて以来、国内における政策にも進展があり、2020年にはアヌココロ アイヌ イコロマケンル（国立アイヌ民族博物館）を含む、民族共生象徴空間、愛称ウポポイが開設されました。また、民間でも様々な書籍の刊行を始めとした取り組みや発信がされる中で、アイヌ民族やアイヌ文化一般に対する関心が高まりつつあります。

ところで、こうした博物館等で扱う「アイヌ文化」は、しばしばその「独自性」が語られ、日中韓の文化や琉球文化とは別個の、明確に他と境界線を引けるものとして紹介されることが一般的ですし、そのように理解されることも多いと感じます。さらに、日中韓の文化が「農耕文化」だとすれば、アイヌ文化やシベリア・カムチャツカの諸文化は「狩猟採集の文化」であるとされ「狩猟民的な世界観」という言い方もされるように、生業の違いが精神文化にも反映していると言われることがあります。そうした捉え方に一定の意義がある場合もあるかと思いますが、充分な学問的検討を経ずにそのような差異を強調すると、それぞれの文化に対するある種の先入観や、場合によっては偏見を形成する一因ともなります。

報告者は、アイヌ民族の宗教や神話を研究する立場から諸文化を見渡すとき、各民族の文化的な個性を感じる一方で、抽象的なレベルでは共通する点が多く、さらには信仰に伴う物質文化の中にも非常に類似したものが見られることを知りました。これらに注目することは、互いの文化を鏡にして自文化の深い省察と理解を促し、更には相互の文化が同じ東アジアや北東ユーラシアといった地域の中で構築されてきたものであり、高い共約可能性を持つことを実感する機会ともなります。このように、宗教についての研究・展示は、当該領域の研究推進にとどまらず、意識の仕方・目標の設定によっては民族間の偏見解消や民族共生といった大きな社会的課題の解決にも資することができると考えます。そのような問題意識に立ち、ここでは、イコロマケンル（国立アイヌ民族博物館）の展示構想と展示品製作にかかわった経験から、

イナウ、イクパスイなどいくつかの具体的なモノと展示を紹介しながら、アイヌ文化研究から見た日本・東アジアの宗教について述べてみたいと思います。そして、そのような文化的連続性は、さらに広い地域につながっていく可能性を持つことについても、若干の指摘をしたいと思います。

1．アイヌ民族について――地理的・歴史的状況

日本列島と大陸に囲まれた地域は、約2万年前の氷期には、北からつながる半島状の地形を形成し、対馬海峡などもかなり接近したと言われています。この地域を「環日本海地域」と呼ぶとすると、アイヌ民族はその北辺、樺太島（ヤンケモシリ、サハリン）から北海道（ヤウンモシリ）、千島列島（ルトム、クリル）、本州（サモロモシリ）の東北北部に暮らしてきました。現在の日本列島には、旧石器時代のころから南北の道を通って数次にわたる人の流入があったと考えられており、こうした人々の営みの中で、アイヌ語、日本語、奄美・琉球語を話す集団が形成されてきたと考えられます。アイヌ語の使用をうかがわせる資料としては、712年に成立したとされる『古事記』などに記されるアイヌ語の地名があります。それ以来、近世までは東北でも、20世紀までは北海道や樺太で、アイヌ語が使用されてきました。

アイヌの居住地の南には、シサム（和人または和民族＝日本語びと）や奄美・琉球の人々など日本列島内の諸民族、朝鮮半島の人々が暮らし、アイヌの北には樺太島内にウイルタ、ニヴフといった民族、アムール川流域のナーナイやウデヘといったトゥングース系の言語を話してきた諸民族（ウイルタ語もトゥングース諸語）、さらにイテリメンなどカムチャツカ半島の諸民族が暮らしてきました。13世紀になると、当時の元朝がアイヌと接触し、それ以来、アイヌは明や清などと朝貢関係を結んできました。また、17世紀の半ばにはロシアもこの地域に到達し、18世紀以降は主として千島列島を通じて南下し、北海道のアイヌとも接触するようになりました。

これに対し、14世紀には東北地方のシサムの一部が北海道南部の函館周辺に拠点を築くようになり、17世紀以降は松前藩を形成して、幕府の認可のもとアイヌとの交易を独占するようになりました。このように、道南と呼ばれる地域には中世からシサムの暮らしがあったものの、北海道在住のシサムもその土地を「蝦夷地（野蛮人の住む土地）」と呼び、意識の上では本州に軸足を置いた生活をしていたと考えられますし、江戸時代に流通していた日本の地図には現在の青森から九州までしか描かれておらず、北海道以北や琉球は国の外に位置づけられていました。

アイヌ民族の信仰をはじめとする文化や歴史は、こうした地理的環境の中で形成されてきました。近代に入ると、日本も近代国家を形成し領土確定と植民地獲得をはじめます。明治の初期に北海道と琉球が日本の版図に組み込まれ、やがて樺太・千島や、

台湾、朝鮮半島も植民地となりました。アイヌ民族が今日的・法的な意味で「先住民族」と呼ばれるのは、この時代に、近代国家に取り込まれたことに端を発します。

これ以後、日本は近世までの政策を大きく転換し、北海道以北に大量の移民を送り込むようになり、アイヌの居住地にシサムをはじめとする南方の諸民族が大挙して移り住むようになります。アイヌ史のもう一つ大きな出来事は、第二次世界大戦における日本の敗戦です。これによって樺太・千島はソビエトの占領下に入り、この地域に移住していた40万人を超すシサムとともに、同地のアイヌも、ほとんど全てが北海道以南に移り住みました。私の祖母は樺太西海岸出身のアイヌ、祖父は北海道から樺太に移住していたアイヌでしたが、敗戦の年に北海道の余市町に避難し、以後私の一族はほとんどが日本で暮らしています。

2.「アイヌ民族の宗教」

上記のように、アイヌ民族の歴史は（一般には周囲から隔絶して来たと考えられていますが)、常に周囲の他民族との接触・交流の中で営まれて来ました。ですから、中世や近世にアイヌ社会に入ってきた日本の信仰やロシア正教に加え、今日では新宗教や新新宗教なども広まり、アイヌ社会の宗教的状況は多様化しています。

一方、このように外から入ってきた時期や経緯が明確な要素を除く、在来的な信仰の中にも、周囲との接触によって形成されてきたものが多く含まれていると考えられます。たとえば、図に示すような木製の像があります（図1)。像と言っても、アイヌ文化における位置づけを知らない人から見れば、刻み目が付いた木の切り株にしか見えないでしょう。これは、20世紀初頭に樺太で作られたもので、流行病などを遠ざける守護神です。マツなどを根のついたまま掘り起こし、逆さにして屋内や村の入り口などに立てて祀ります。正面にある刻み目は、目鼻に見立てられていて、この部分に酒や食物を付けることでこの像に捧げることができると言います。実物としては未見ですが、こうした像により具象的な人面を彫った物もあり、ナンコロペ（顔を持つもの）という呼称もあります。個人的なことで恐縮ですが、私の地元の文化として思い入れもあります。一方でアイヌ文化全体から見ると、この像には疑問がわくところもあります。例えば、北海道では、和文化と同じく「逆柱」を嫌う習慣があります

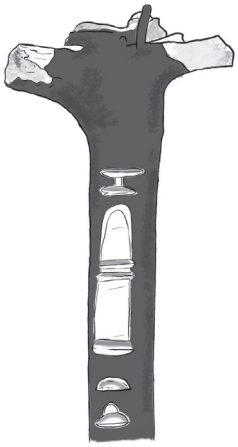


図1　樺太西海岸来知志村　敗戦後

から、その立場からすればこのような根を上にして立てた像はまがまがしいものに映ります。

一方、ユジノサハリンスクの博物館に行きますと、ニヴフの資料としてほぼ同じ形をした像が展示されています。また、大陸のウデヘ文化や朝鮮半島の文化、またシサムのうち秋田県の文化にも同じような木の根を使った逆木の神像があります。そして、この地域の歴史を知るうちに、この神像の分布に、意味のあるつながりが見えてきました。例えばアイヌとニヴフは様々な文化を共有してきましたし、アムール川流域の諸民族や朝鮮半島の人々、本州のシサムとも接点や交流がありました。また、ウデヘなどの諸民族も、朝鮮半島の古代国家や中国の諸国家との交流があり、渤海のように朝鮮の古代国家が環日本海地域を北回りで往来したと考えられるケースもあります。

つまり、一見アイヌ文化や日本文化の中では異質に見える「逆木の神像」は、造像の様式や用い方において共通する神像の分布域の一部であると見ることができます。可能性として、アイヌ文化や日本文化とは異なる地域で成立した神像の様式を、環日本海地域を通じた交流によって受容したと考えれば、逆柱の忌避など、他の宗教的な慣習と矛盾するかのようなあり方も説明がつきます。このように、アイヌの信仰を内から見ていくことだけでなく、通文化的な比較によって外から見ていくアプローチによって、相互の宗教について理解が深まることが期待されます。私は、以前はもっぱら内からのアプローチをしていましたが、近年はより広い地域の中でアイヌ文化を見ることに関心を持っています。イコロマケンルでの展示でも、交流史や通文化的比較の視点を盛り込んでいただけるようご提案しました。

3. 在来的な信仰

3－1. 世界観と神観

アイヌの在来的な世界観には、垂直的世界観と水平的世界観が重なっています。前者は「天」や「地下」など、人間界から見て垂直の方向に異世界が存在するとする思想で北方的とされるもの、後者は海の向こうや深山など水平方向に異世界があるとする思想で南方的とされるものです。この2重の世界観を知っておくことは、儀礼や神話を理解する上でも重要になるため、イコロマケンルでも大きな図版を入れたパネルや動画で解説しています（図2）。

また信仰のあり方としてはアニミズムとシャマニズムの要素を持つため、自然界の様々なものに神性を認めます。人の生活は、神々の恩恵によってあると考え、報恩のための儀礼を行います。また、しばしば天然痘など恐ろしいものを神として祀ることもあります。恐ろしいものに対しては、遠ざける対処法と、祈りによってコミュニケーションをはかり、人間の意に沿って振舞ってくれるように働きかける対処法があります。

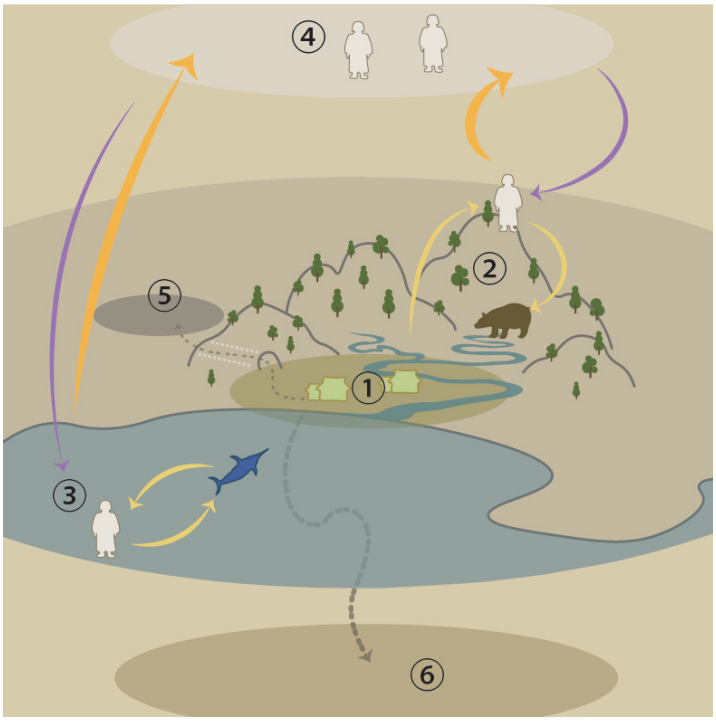


図２　水平的／垂直的世界観

①人里　②山の神界　③沖の神界　④天界　⑤他界　⑥地獄

このように人と神は対置されて語られますが、一方で各家系の祖先をたどると何らかの神に行きつくとも言い、また人が死後に子孫を見守るとか、神に列せられることもありますから、人と神は連続的な存在でもあります。儀礼の場での神は威厳をたたえた存在とされますが、神話の中では人間的に振舞い愛嬌を感じさせることも多くあります。また、神々には性別があり、人間と同じように婚姻関係を持つなど、神々の社会を形成していると考えられます。もっとも、神の観念も統一的・普遍的なものではなく、地域によってしばしば大きく異なり、おそらく歴史的にも変化してきたでしょう。例えば、最も重要とされるのは火神ですが、北海道の東部から北部では、囲炉裏の中に男女の火神が鎮座するとされるのに対し、樺太や北海道西部では火神は女神で、しばしば家の守護神を伴侶とするといわれています（図３）。

こうした様々な点は、定島（1995）や三橋（2007）に見る神道の特徴とも、大部分が重なるように思います。もっとも、アイヌの儀礼はシャマンの儀礼を除けば、神主や僧侶のような専門職が執り行うものではなく、男性であれば誰でも実践します。また、近代以前のアイヌ社会には貧富の差はあっても制度的な身分はありませんから、王族もいません。したがって、皇祖神のような神格もありません。

図３　火神観念の地域差

３－２．儀礼

久保寺逸彦先生が、北海道太平洋岸の沙流川流域で調査をした際に、このような逸話があります。久保寺先生がサイダーを飲んで、びんを捨てると、同行していたお婆さんに叱られたそうです。ゴミを捨てたので叱られたのかと思ったら、そうではなく「このびんのおかげでサイダーを飲むことができたのだ、放り投げるのでなく礼を言ってそこに置きなさい」ということなのでした。このように、ちょっとした折に感謝を告げることも広義の儀礼と呼ぶことができますが、もう少し改まって行われる儀礼には、年中行事のように１年のサイクルにそって行われるものがあり、例えば春と秋の大祭、植物の採取を始める時期、畑作を始める時期、魚の遡上の時期に行うものなどがあります。春秋に大きな儀礼を行うことは、夏至・冬至と関わるのではないかと思われます。アイヌ語にも 12 か月の月名がありますし、影の長さを測ることで夏至・冬至を観測したと思われる習慣もあります。生業と結びついた儀礼は、おおよそ決まった時期に行われます。このほか、クマなどの重要な動物が獲れた時や、冠婚葬祭などは必要に応じて行われます。

儀礼の中心は、祈り詞を唱えることと、神酒や後に述べるイナウを捧げることです。神々に囲まれて暮らしているといっても、日常的に全ての神に祈るわけではなく、祭祀の対象は生活に関わりのある神です。また、動植物は生活する上で重要な存在です

が、人が直に接する動植物とは別に、それらを統べる観念上の神がいると考えられ、年中行事で祈願をするのは主に観念上の神格です。

３－３. 送り儀礼

年中行事に対し、人間が入手した自然物に宿る霊魂（神）を、神界に送り返す儀礼があります。例えば、日常の器物は人々が自製し、使用を終えると神界に送り返します。船であれば、山から切り出した樹木から作るため使い終えた船の霊魂は樹木の世界へ、樹皮を用いた衣服も樹木の世界へ送り返すという例があります。また、狩猟などで動物を得ると、小動物の場合は比較的簡素に行いますが、クマなどの場合は、近隣からも人を呼び、多量の供物を用意するなど、儀礼の規模が大きくなります。シマフクロウの送り儀礼も重要とされますが、供物の量などで考えると、クマの方が盛大ということもできるように思います。

クマに対する儀礼には、狩猟で得たクマを対象とするものと、子グマを飼養して行うものとがあります。クマを対象とする儀礼は本州を含め、ユーラシアから北米にかけて広く見られますが、飼いグマ送りはアイヌからアムール川河口部のいくつかの民族にのみ行われてきました。イコロマケンルの基本展示場には、飼いグマ送りのための子グマを繋ぐ杭や、子グマのための装飾が展示されています（図 4、図 5）。これら

図 4　北海道博物館収蔵　資料番号 89525
熊つなぎ杭模型　L60W2 (2)

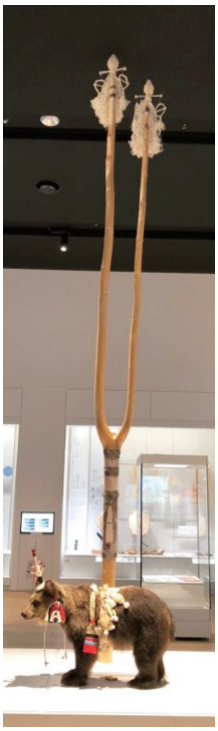


図 5　クマ繋ぎ杭とクマの装飾
国立アイヌ民族博物館　基本展示室

は樺太アイヌのもので、この杭は本来は10mほどの高さがあり、クマの装飾とともに樺太北部からアムールの諸文化と共通性を示すものです。北海道に移住した樺太アイヌによって、1960年頃に作られたのを最後に、作られなくなりました。クマ送りが行われなくなったことと、差別や抑圧により、信仰や言語を維持することが難しくなったためです。イコロマケンルやウポポイはアイヌ文化復興の拠点と位置付けられ、こうした文化の取り戻しが基本的な機能の1つです。その展示を象徴するものとして、同館の開館にあわせ、研究者の記録や写真、博物館資料をもとに製作しました。クマの頭飾りやクマの帯など、いずれも現代の工芸家は使っていない技術が用いられており、資料の観察を通じて技術も復元しました。

4. イナウ

先ほどのクマを繋ぐ杭の先端に結ばれていたものをイナウと呼びます。樹木を乾燥させ、表面を小刀で削って房状にしたものが多く見られます。同じイナウという名称でよばれるものにも、形や大きさが様々にあり、形の違いには象徴的な意味がこめられています。ごく単純化していうと、大きくて複雑なものほど良いイナウで、またイナウにも性別があり、祈願の場にふさわしいものを使うことが大切だとされます。かつての研究では「依代」と解釈されたこともありましたが、イナウの基本的な働きは神へのメッセンジャーであり、またそれ自体が贈り物ともなることです（図6）。

イナウの形は、18世紀の末ころから記録が残っていますが、そのころには比較的明確な地域差が確認できます。そこで、イナウの形、意味づけ、用い方を比較することでアイヌ文化内部の多様性を見ることができます。大まかに言うと、イナウの共通性から北海道を南西部と北東部の2地域に分けることができ、北東部は樺太とも連続性を持っています。

また、アイヌより北方のニヴフやウイルタ、ウリチ、オロチョンなどの諸民族にも見られ、南のシサムでは民間信仰や寺社の儀礼に取り込まれている例があります（図7、図8）。さらに台湾、ラオス、ボルネオ、インド、オーストラリアなど、アジアに広く類似の木製品が見られます。ユーラシア

図6　北海道アイヌのイナウ
北海道大学植物園収蔵 資料番号10722

図 7　ウイルタのイッラウ　北海道大学植物園収蔵　資料番号 33725

図 8　シサム（秋田県）梵天
国立民族学博物館収蔵

西部のハンガリーやジョージア、フィンランドでは、在地の信仰やキリスト教と結びついて使われています（図 9）。聖水を撒く器具として、イナウに酷似した木製品が使われることもあります。このような東西の共通性が、これまで注目されてこなかったのは、ある民族の文化とは個別・独自のものであるという先入観の影響も大いにあるでしょう。イコロマケンルでは、イナウとあわせて、ハンガリーなどの類似の木製品を展示しています。

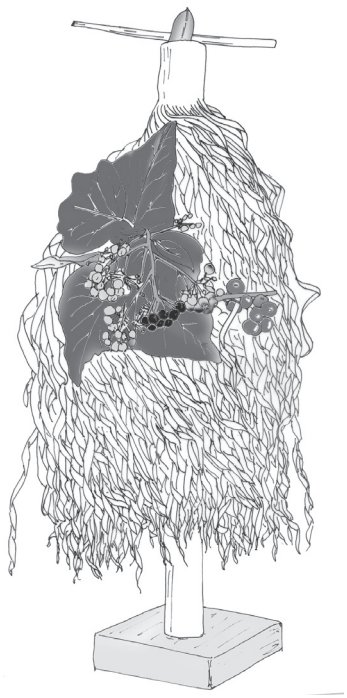


図 9　ジョージアのチチラキ
今石みぎわ氏作図

5. イクパスイ

儀礼の際の重要な供物として神酒があります。神酒はトゥキと呼ばれる漆椀に注がれ、イクパスイやイクニシと呼ばれる箆状の木製品で振り撒くことで神々に届くとされます（図 10）。トゥキは日本語の「杯（つき）」の借用語だとされ、漆椀と、それを乗せる天目台も日本から交易によって得たものです。天目台は本来は焼き物の茶碗を乗せるもので、アイヌとの交易によって漆器の産地にも刺激が加わり、対アイヌ用に新しい様式を生み出したと言われています。ただ、この台の形や椀状の器との組み合わせは、仏教の洒水器や吉田神道の護摩壇に用いられるものとも共通しています。より深い探求をすることで、こうした器と台のペアが生まれた背景がさらに分かるかも知れません。

また、イクパスイはアイヌ民族が自製してきた物で、文献上の初出は 16 世紀、考古資料によっては 15 世紀から 10 世紀頃まで遡るのではないかといわれています。イクパスイの先端を、酒器の中の酒に浸し、

図 10　右手にイクパスイを持ち、
祈願をする男性

祭壇や神のいる場所に酒の滴を振りかけます。実は、この形状や用い方は、真言宗などの洒水加持で使われる散杖と洒水器にたいへんよく似ています（図 11、図 12）。散杖はヤナギや桃の木の枝などで作られる、装飾のほとんどない棒で、仏教の内部ではインドから伝来したものと考えられているようです。これらの共通性には注目したいところですが、一方で振り撒く液体は仏教では清め、アイヌ文化では美味なものを神に献ずるという点で異なっています。また、イクパスイはアイヌが作る木製品のなかでも、特に変化に富む美しい装飾が施されています。これに近いものは、むしろアムールからシベリア・モンゴルの諸文化に見られます。例えば、モンゴルやトゥヴァでは、装飾を施したスプーンや箆で、茶や馬乳酒などを振り撒く儀礼を行います。アイヌのイクパスイの形状や装飾は、こちらとの連続性で理解したほうが妥当なように思えます。

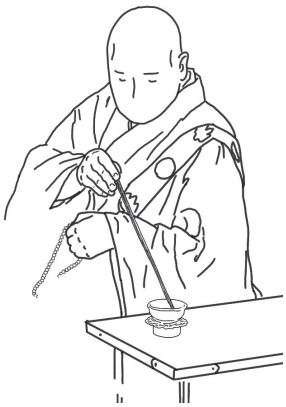


図 11　真言宗青蓮寺（鎌倉市）の洒水加持

図 12　洒水器

仮にイクパスイとトゥキのペアが成立した経緯を考えてみると、①水や茶、酒などの飲料を撒いて献ずる習慣が北東ユーラシアに広まる、②アイヌと北方文化とのつながりの中で、飲料を撒くために装飾的な箆を用いる文化が形成される、③仏教・神道文化との接触の中で洒水器状の器が取り入れられる、といった流れを想定することも可能ではないでしょうか。蓑島栄紀氏は、古代に東北や北海道に密教文化が伝わった痕跡に注目した研究をなさっていますが、その可能性はこうした祭器の類似からも補強できるのではないかと思います。

イクパスイそのものも、アイヌの内にあっても地方ごとの特色が豊かで、イコロマケンルの展示では、アイヌ文化内の多様性を示す展示をしています。いずれは、イクパスイについても通文化的な比較がされると良いと思いますが、そのためにも諸宗教の研究をされている方々との交流を深めていきたいと考えています。

おわりに

以上はなはだ簡単ではありますが、アイヌの信仰と周囲との関係性について、いくつかの話題を紹介いたしました。アイヌ文化研究と展示が、アイヌの信仰だけでなくアジア・ユーラシアの諸宗教をも照らし出し、それぞれの深い理解につながっていく可能性を感じています。お読みになった方にもそれを感じていただければ幸いです。また、既にこうした領域について深い知見をお持ちの方も多いことと思いますので、私の誤りや、知識の不足、視野の狭さをただしていただければ、望外の喜びです。

参考文献

今石みぎわ・北原次郎太 2015『花とイナウ―世界の中のアイヌ文化―（アイヌ・先住民研究センターブックレット 4)』北海道大学アイヌ・先住民研究センター。https://www.cais.hokudai.ac.jp/wp-content/uploads/2019/05/booklet04_hanatoinau.pdf

内田祐一 2006「第 11 章　イクパスイの機能についての一考察―特にイクパスイの彫刻における機能について―」『アイヌ文化と北海道の中世社会』北海道出版企画センター。

大林太良 1985「熊祭の歴史民族学的研究―学史的展望―」『国立民族学博物館研究報告』第 10 巻第 2 号。

北原次郎太 2007「火の神の夫―apekamuy・cisekorkamuy・cisekamuy―」『千葉大学ユーラシア言語文化論集』第 10 号、千葉大学ユーラシア言語文化論講座。https://opac.ll.chiba-u.jp/da/curator/900080862/2008no.10_105_142.pdf

北原次郎太 2015「ikupasuy の口舌型式再検討」『千葉大学ユーラシア言語文化論集』第 17 号、千葉大学ユーラシア言語文化論講座。

金田一京助・杉山寿栄男 1993（1942）『アイヌ芸術　木工篇』北海道出版企画センター。

久保寺逸彦 1977『アイヌ叙事詩神謡・聖伝の研究』岩波書店。

クレイノヴィチ, E. A. 1993（1973）『サハリン・アムール民族誌―ニヴフ族の生活と世界観―』枡本哲訳、法政大学出版局。

河野広道 1971（1933）「アイヌのキケウシパシュイ」『河野広道著作集Ⅰ　北方文化論』北海道出版企画センター。

定島尚子 1995「日本における社会意識としての神観念」『現代行動科学会誌』第 11 号、現代行動科学会。

中村圭志 2016『図解世界 5 大宗教全史』ディスカヴァー・トゥエンティワン。

名取武光 1941「沙流アイヌの熊送りに於ける神々の由来とヌサ」『北方文化研究報告』第 4 輯、北海道帝國大學。

三橋健 2007『神社の由来がわかる小事典』PHP 研究所。

蓑島栄紀 2015『「もの」と交易の古代北方史―奈良・平安日本と北海道・アイヌ―』勉誠出版。

和田完 1999『サハリン・アイヌの熊祭　ピウスツキの論文を中心に』第一書房。

國學院大學研究開発推進機構日本文化研究所

2022年度国際研究フォーラム
「ミュージアムでみせる宗教文化」報告書

令和 6 年 2 月 29 日　発行

発 行 者　平藤喜久子
編集担当　星野　靖二
　　吉永　博彰
　　川嶋　麗華
印 刷 所　株式会社 小薬印刷所
発 行 所　國學院大學研究開発推進機構日本文化研究所
　　東京都渋谷区東 4 丁目10番28号
　　郵便番号　150-8440
　　電話　03-5466-0162
　　FAX　03-5466-9237